小笠原島紀事 十六

和書門
二九三四五 號
二三七 函
一二 架
三三 冊

内閣文庫
和書 類
二九三四五 號
三三 冊
一七三 函
一四 架

内閣文庫
番號	和	29345
冊數		33（16）
函號	173	181

地 七 九

国立公文書館 National Archives of Japan

西

従元治元年十一月四日
至元治元年十二月四日

控

小笠原島紀事巻之十四

一〇八八八號

目録

文久三年ノ下

十二月四日去月十三日所進出ノ返簡本日再進出

同七日菊池伊豫守指揮シテ當四日於平野船差出ス所同船雇外國人共糺明ノ口書ヲ俗文ニ更メ可進出旨ヲ演達ス

就右犯罪ノ最初ヨリ横濱ニ連来リ岡士ヘ交付スル迄ノ大意書ヲ作リ外國人共六名ノ口書ヲ

副テ伊豫守ニ進出ス
同大意書
同外國人六名口書
同月不詳日附鎖港談判ノ大事件アレハ小事ニ論爭ヲ費スハ却テ後害端緒姑ク因循シ其事ヲ折衷シ半彼ヲ宥メテ請求ニ應セサルノ返翰投達可然ト外國奉行連署シテ申稟
同申稟
同返翰案
同十日閣老外國奉行ノ申稟ヲ採用ス

同日本日ノ日附ヲ加ヘ公使館ヘ達ス
同十五日亞公使又償金請求ニ同意ナキ時ハ兵力ヲ以テ談ヲ遂ヘク此談治定ナキ限ハ使節發遣若推テ發遣ストモ其詮ナカルヘキナト數件ノ書翰ヲ進出ス
同來翰譯文
同廿四日閣老連署シテ池田筑後守河津伊豆守河田貫之助等ヲ歐米各國ヘ使節トシテ近日發遣ノ報知ノ書翰ヲ贈ル
同書翰案

同日荷蘭公使ヘモ同断ノ書翰ヲ達ス

同日屬日請求ノ事件談判未決ノ間ハ本國ヘノ便節周旋アルマシキトノ旨趣ハ懇親之間ニハ不相應ナリ何レニモ別紙發遣ノ報知本國政府ヘ通達アランヿヲ請フ旨閣老連署ノ書翰ヲ達ス

同書翰案

同日善福寺燒失後亞公使横濱滯留同寺再建ヲ待ツニ其事遅延催促數回ニ及ヘトモ未再建ニ至ラス然ルニ屬日善福寺燒失ヲ始數件ノ償金ヲ請求スルモ彼日所請ニ應セサルヲ憤リ士官ヲ引卒シ推テ出府セン事ヲ報知ス因テ未タ時機其場ニアラス今暫ク出府然ルヘカラズトノ書翰ヲ達ス

同書翰案

同廿四日去ル十五日亞公使ヨリ来翰中ホーツン一件ハ中濱万次郎始其節事件ニ関係ノ者同國岡士ヘ今一應両晤懇ク談判セハ條理ナラン事ヲ外國奉行連署シ上申ス

同申稟

同指令

同廿七日亞國岡士ヘノ書翰案シ草シ閣老ヘ進達ス

同書翰案

同日許可ノ指令

同日同心ニ書簡ヲ齎ラシ逓達ヲ命ス同心鞍馬ヲ鞭ヲ加ヘ馳テ横濱岡士舘ニ達ス

同廿八日小花作之助中濱万次郎原又吉ノ三士横濱ヘ出張ス

同廿九日三士岡士ト應接ス

同對話書

同晦日三士帰府復命

同日先是去ル十五日亞公使進出スル所ノ善福寺焼失ヲ始神奈川事件且ホーツン一條彼本國政府ノ命ナリト唱ヘ償金ヲ強情ニ請求ス斯テ書面ノ往復ニ時日ヲ費ス間ニ如何様之不都合生ランモ計リ難シ仰願閣老出張シ談判スル歟又参政ヲ遣リテ説破スル歟ノ間至當ナルヘキ旨ノ申稟及返翰案辨駁書草ス

同申稟案

同返翰案
同辨駁書草案
同横濱工商等亞人ヘ負債催促一件神奈川奉行
ヘ顛末ヲ糺明シ申稟スヘキ旨ヲ達ス
同神奈川奉行取調書
同日亞國公使又日本政府ノ命ナリト唱ヘ長州
償金ヲ請求ノ書翰ヲ進出ス
同右ニ就又局中ノ議變シ閣老及参政事件ノ辨
駁ハ姑ク閣キ只返翰而已ヲ贈テ神奈川事件ハ
神奈川奉行ホールツン一條ハ外國奉行應接上ニ熟

談スヘシトノ旨趣ヲ通達スル方可然ニ評決ス
同十九日去ル十五日亞公使ヨリノ来翰譯成同
日返翰案ヲ草ス
同廿四日淨書
同晦日再ヒ正直ニ進達ス
文久四年 三月朔日改元元治
正月四日舊臘正直ニ進達スル所ノ返翰案交還
十二月晦日ノ日附ヲ加ヘ神奈川方ヘ交付亞國
公使館ヘ贈達ス
同日旧臘廿八日進達スル所ノ横濱工商共亞國

人ヘ負債催促ノ一件ノ返翰モ本日交還因テ右
一同贈達ス

同日旧臘晦日亜公使ヨリ進出ス長州償金一件
催促ノ書翰注視ノ申稟ニ来翰譯文返翰案ヲ添
進達ス

同申稟

同亜公使ヨリ来翰案ヲ添進達ス

同返翰案

同廿六日返翰案施行スヘキ旨ノ指令アリテ交
還

同日本日ノ本日附ヲ加ヘ贈達ス

旧臘ヨリ早春マテノ形勢崖略

同月日附不詳外國奉行竹本隼人正竹本甲斐守横濱
出張談判スレトモ復肯セス

右談判整難キヲ察シ尚外國奉行議シテホーツ
ンハ八十有余ノ極老且病體愍然ナルヲ名トシ
出格ノ仁恵ヲ以テ眷養並舩中費用トシテ洋銀
千弗ヲ恩賜アルニ談判ヲ纏ムル方可然ト決議
シ具旨ヲ申稟ス

同申稟書

同許可ノ指令
右事件竹本甲斐守擔當シ談判數回遂ニ熟話ス
四月廿日一件熟話ニ及フノ謝辭トシテ閣老連署ノ書翰贈達スヘシト案ヲ草シ本日進達
同廿二日外國奉行連署賜銀ノ添翰ヲ草シ進達ス
同廿七日神奈川奉行賜銀神奈川税關ノ銀ヲ以
ヲ投與スヘシトノ達案ヲ添去ル廿日廿二日兩度ニ進達之書翰案交還
同神奈川奉行ヘ達案
同閣老ヨリノ書翰案
同廿九日本日ノ日附ヲ加ヘ兩通共神奈川方ヘ達ス
五月四日亞公使及同岡士ヨリ賜銀收領ノ書神奈川方ヨリ達來ル

小笠原島記事巻之十四

内一〇八八八號

本年三月大將軍德川家茂上洛鳳闕ニ參上
龍顔ヲ拜ス先是鎖港ノ勅諚屢アリト雖モ左之右之其實効ヲ奏セザリシカバ同四月廿一日外國拒絶五月十日期限タルヘキ旨更ニ勅命ヲ下サル幕府
叡旨ヲ遵奉シ閣老圖書頭小笠原長行ヲシテ横濱在留各國公使ニ邦内人心外交ヲ好マズ動モスレハ外國人ヲ圖ントスル者衆ク政府殆ント謀慮ニ困苦ス因テ天朝幕府ニ勅シテ各國ニ説諭シ横濱長崎箱館ノ三港ヲ鎖シ外交ヲ絶シムル請フ各位其之ヲ領

セヨト説シム公便等之ヲ首肯セズ已ニ條約ヲ結ビ永ク互ニ渝ハラサル旨ヲ盟フ今其盟ヲ破ラントスルハ是意外ノ變也變ヲ謀レバ亦随テ變生ラン固吾儕ハ本國ノ命ヲ受彌々益々交際ノ篤キヲ修セン為ニ在留シ乍チ争テ拒絶ノ談判ニ関リ且縦ニ両國ノ交不交ヲ決センヤ是非ハ姑ク閣キ推テ鎖港ノ商量ヲ遂ントナラバ日本政府ニ謀ラルベシ吾儕ノ進退ハ啻本國ノ命令ニ従ハン而已ト答ヘ其躰勢確然トシテ毫釐モ動ク氣色ナシ此應接数回ノ後竟ニ便節ヲ海外ニ発遣スヘシト廟議決定リ外國奉行筑後守

池田長溥ヲ正使ト爲シ同職伊豆守河津　ヲ其副ト定メ監察河田貫之助ヲ差副鎖港ノ談判ヲ為サシメントス旃ノミナラズ本年五月十日毛利宰相奉勅攘夷ト唱ヘ其領内長門國赤間関ニ於テ亜米利加ノ商船ヲ砲撃ヲ始トシ其後英佛蘭等ノ軍艦ニ発砲セシカバ以上ノ國々其暴行ヲ幕府ニ督責シ償贖ヲ促スノ時ニ脅リ亜公便ガ假便臣館善福寺ノ祝融モ放火ナルベシト狐疑ヲ懐キ烏有諸品ノ償却ヲ償リ之ニ加ルニ生麥事件ノ末已當五月英國逼リテ兵端ヲ開クベキ形勢ニ推選リ在留ノ外國人ハ姑ク其地

国立公文書館 National Archives of Japan

ヲ避ケ内國人ハ老幼婦女ヲ扶ケ去ラシメ不測ノ災厄ヲ免ルヘシトノ布告アリシヨリ土地ノ騒擾鼎涌ノ如シ此時亜國人ニ償ヲ負セシ者催促ニ及シヲ暴行也ト唱ヘ己ガ非ヲ蘊ミ負債ヲ不償耳非ス是ヲ辞柄トシ其償贖ヲ政府ニ督債ス在斯事件輻湊ノ時ニ臨ミ僅ニ小笠原島罪人ノ小事件ヲ説破シ假令充分ノ勝利アリトモ餘事数件ノ中鎖港ハ最モ國ノ大事一旦親睦ノ條約ヲ結ビ今反覆シテ交信ヲ断ントス其聲牙彼ニ理アリテ此ニ理無ケレバ布留那ノ弁舌ヲ以テ説クモ成功ノ難キハ必然タリ然ル大事ヲ眼前ニ置キ小事ニ募ルハ無謀ニ通シト内議紛紜来翰ト共ニ進達スル所ノ返翰案モ其儘閣老ノ手ニヤ留リケン可否ノ指令モ無ク十一月モ空ク過ギ十二月ニ至レドモ何ノ沙汰モ無シ抑方今亜國公使ヨリ件々苦情申稟貪償金ヲ債リ取ラントノ較計ニ出レバ十二分ニ弁駁セザレハ彼容易ニ服スベカラズ如此因循数十日ヲ將ル時ハ彼ニ論説ノ種ヲ与フノ處分ニ當リ益募リ辨論ヲ立ツベシ然ル時機ニ至ラザル前ニ辨解ノ神速ナルコソ肝要ナレト同四日再ヒ先月十三日正直ニ進達セシ返翰案ヲ閣老遠江守有馬道

純ニ進出ス閣老ノ商議事情不貫徹ノ事ヤアリケン
同七日外國奉行菊池伊豫守隆吉指揮シテ平野船雇
役ノ外國人六人ノ上稟解シ難キハ冝ク通俗ノ文ニ
更タメ進出サセシム當時小花作之助既ニ帰リ在ル
ニ因リ實地ノ處分且大意書ヲ作リ六人ノ口書ニ附
ス其書如在

大意

一平野ニ船鯨猟ニ出帆南四月廿一日夕小笠原島へ立帰リ
港外兄島之湾へ碇泊致し右船雇鯨猟之者共
并雇並組頭外國人六人共一ト先父島諸之居宅へ
帰船為致帰候節ウイルレムスミスと申者外三人之者
取荷物并道具等雇中給料之貸渡共并
働方も無之宜敷取雇候ニ付其後右ニ荷物雑并渡次
第申候ニ付同日夫上陸致し右スミスと同居
致候ニ付ジヨージホーツンと申合其夜疑之節へ立退候処
無之共携へ本船へ申談無之候節右為之旨
之義同船相越候之内ジヨンウイルレム尺請取立退
取候ニ付其段申談仕候中濱万次郎へ申
出候間早速吟味ニ取掛り荷物請取ニ相越右為之無之
致候ニ付一相違無之故其程被捕即日ニ扇ヶ浦ニ役所

之方ヘ連来リ明キ家ヘ押込食事等為致南陵ト之無
島民一同呼集前件之次第相認メ申渡候ニ付ホーツン
儀前ニ而誘シ所業ニ而無之事拒ミ申出候得共右之次第
此度之事ニ関係不致候ト兼而無之全ク此者相之関
係之申口ニ有之候ニ付通口書を取リ置候四月廿九日平野私
ヘ案組セシ節大村之居宅ヘ而右連越ホーツン之申ニ而海
ヲ世話荷物等悉ク右纏私中ヘ持込同人拾地所之儀ニ付セ
ムスミスと申ものヘ右對シ譲渡シ候得共正月中
水理洗後右處ヘ同人拾地右免シ置候證拠之済シ置候無故
鎮島ニ而右スミスヘ相譲リ右荷物等モ重シ候而五月朔日

小笠原島出帆同月十一日横浜表ヘ連渡リ候節前件
之次第相江戸表ヘ相伺候上右委細羅状之次第中浜万
次郎并同人私後権之丞小人目付林和一郎よりコンシユ
ルヘ申談候処英羅人共之申口相違無之趣ニ而請取置
引渡済之後彼是申立候処同月廿二日ホーツン外申出次第も有
之候旨拒一旦小笠原島ヘ連来候士官ニ引合被致コンシユル
ヘ申出候ニ付右三人之もの又ハ横浜表ニ而右越拒言等之
通申談候ニ付右拒羅状相違も無之上英吏之羅科之処無之
ニ付ホーツン儀を彼島ニ被一度帰シ出候ニ付候而難相
成節亜米利加国サンフランシスコヘ差送シ同中ニ而近ニ而ヶ月為拒

承られ度候旨右箇条之趣申談候処是迄引合候
儀も無之旨コンシユル申立候ニ付自政府江仕出候後ニ至り
中浜万次郎相糺候処左の六人之口書

一 ベンシヤムウイルレムス
但此者ハ亜墨利加州之産ニ而小笠原島江来り住居ホーツンの隣ニ住居致
し居既ニ亦スミス并ホーツン等出帆之節ニ至り居合候者ニ付
此趣之口書

スミスガホーツンニ向ていふ我荷物を一同戻す方ニ助力せずとも不苦
申を海ニ投ち捨ふべし且紙を捨て行く我をも助る
やといひしに短筒を持参致し荷物を戻に落せ勧る其
のあらハ我丈を打るへしとホーツンいひし由

スミスガホーツンニ向ていふ我荷物を此度方ニ助力せずとも不
物を其を海ニ投るあふへし且紙を捨ち行く我
を助るやといひしに短筒を持参致し荷物を
戻ニ落せ勧るものあらハ我丈を打るへしとホーツン
いひし由

一 シヨンチヤルレス
但此者もホーツンと同居人ニ而千歳之船子也ニ而此趣之口書
ホーツン候スミスと荷物を〆て出帆之節雷筒を持入以一度
鉄砲打候を所持ニ而座ニ居候処粗家内ニ居候由

一 セームスミス

但此者ハ去ル二月中入港致候サントーイス鯨猟船より小笠原島へ
上陸いたし候ニ付其後中浜万次郎へ被雇平生船へ乗組候者の旨相
糺候処申口書

ウイルレムスミスメ右船ヘ同行して荷物を差返し差免
申聞候ニ付其後を不差置当本船ハ入港居り合候処我より中浜
へ乞受荷物者差戻方之儀ハ今日も船へ由くたつれとよせ
し由

一 フヰレアホーベン

但此者ハ前同行之船々中浜万次郎雇上ルもの之者船中之出右働候
者之旨右糺候処ヲ口書

ウイルレムスミス船中乗組中の不業をよし承知致来候へハ
実ニ不埒の次第故荷物を差戻として本船へ返し候事ハ
不返と端船中ニて申ちしうハホートウン並海り度趣ト
申出候処ウイルレムスミス申抗致し荷物を戻し候而敵対致さる
ものあらハ我まを打倒すへしといひし由

一 シヨンウイルレム

但此者も大村住居のセイホレと申ものゝ方ニ同居致し在候もの而
中浜万次郎に雇われ同船致候ものゝ旨右糺候処ヲ口書

翌朝平生船へ出銭候処大村之ホートウン乗組候而一船を差致
候ニ付不返事と之旨再銭ニ不返旨申談之差揺乗込候且
又スミスが荷物を差戻の為ニ出銭為万次郎ニ荷揺させ不
なさつれとも申聞候旨何連ニも荷揺をも不致候旨右並候もの
同本船へ差船右談何連も乗移り候て揺り端船へ引残り

り私の始末ヲ致積り之処ホーレツン急ニ極り之落玉込致し有
之候短筒を二言落候旨右短筒を其儘發炮ニ及ハ殺哉
云々し中浜へ参候し手合訴へ出ニ付知時刻十五分
程過ぎホーレツン来りて我落セし短筒を所持なし
居るやと申ひしに所持候事を其私へ掛合せしハ
全ニ憎ありと申候由

一 ベンジメンモーレキン

但此者ハ大村住居のチヨージブラホールと申者方ニ同居罷在候カナカ人
ニて中浜万次郎ニ被雇候私以前ハ其の旨右訳之通ニ書

スミス二語私と為本私へ申越候ハ私中ニ我落物を二言二戻して
申越之も若し我ニ敵対する者のあらハ打殺ニ可申旨相

申し居候と義り候由

右之外右訳之通り何も申上候事無之且千場所ニ関係之義候之付
右以治上申述候ト云々

先月十三日及當月四日進達シタリシ返翰案ハ細論
ニ亘リ一時彼ヲ壓倒スルノ利アリト雖モ先今度ハ
強テ曲直是非ヲ論セス撮示ノ返翰ヲ贈リ彼ガ督促
ヲ防キ漸次ヲ以テ辯駁セバ却テ説得ニ易カルベシ
今彼ノ請求理リ無キヲ責メハ必憤悱シテ鎖港ノ談
判ニ障碍シ長州償金及善福寺焼亡ノ事ニ嘆唷ノ説
ヲ立ルニ至ラバ後日ノ災害ヲ醸ズハ顕然也ト復返

翰案ヲ草シ上陳ヲ附シテ進達ス

亜墨利加公使より弁理公使長文書翰翻訳一覧仕候処
奈川表ニ於テ関係仕候条件ヲ毎々清政府ヘ申出候所
右ニ付ヘ清ノ下ヘ右等事情巨細ニ申調中ニ有之候仕候旨申
上置候処右書面清国ヘ通置ニ候得共期限ニ清政府ヘ長事ニ有
清国ニ差置不申候日ニ相譲り弁理公使挨拶有之候ニ至り候人
必苦情ヲ申出候ニ政府ヘ取持方申遣し熟議ニ至り御弁
仕候処中ニ立候ニ付同件を当年四月中善福寺焼失ニ候得
政府ヨリ昌ニ出候程疑惑致し種々之根ニ而右件附会致し
矯誣之謗説を構へ鄭重之儀本国政府より申越

以来申出候事ニ有之候ニ右者殊ニ最初ニ而苦情申立候事ニ付
之候ニ私共毎度引合なよひ事実了解致し候事に付
右折柄語合之三の小者等を立之近之始末書清書以同
を以領度候ニ付本国政府へ之申立之候様ニ有之通
被成候ニ付右様之始末ニ及候ニ政府之命令ニ付甲
已ニ建議ニ仕候右近臣ニ被仰付候所謂ニ有之
相成候和親ニ於テ之為清国へ申越たりから清国之悪し
様ニ申さし却而弊習之媒蘖致し以而筋合ニ而
愈以ニ悪之申出候ニ付議定ニ対し不ニ而後ニ被存候
甚厳説破仕度且又一体各国公使も閣下在留ニ付

條約ニ明文有之候ニ付而右をも不申出彼方より引退候
由此方よりも申立退候も何も無之條約違犯之筋ニ無之既
ニ先年亜國書記官殺害被致候節英佛蘭公使も横
濱へ退去候得共獨亜國先任公使ハルリス而已者國政府
之懇親之廉を存し都下ニ在留致し事ニ付同人之重任之
候彼方政府へ被貸當職之節も右様之廉同人一入勲労
之趣被仰越候由右ニ付反覆仕候へ共此方より退
去之儀被仰入候事ニ付不都合之儀ニ付而前著柄格別
之深意も有之候ニ付横濱場合相當之中強而横濱
表へ可引ニ付候出府之儀無之度申出候も彼是申拒ニ

至候事を今般今日ニ福寺焼失ニ付致候得共事実此方ニ
も五分之弱之有之書中申立之趣強而論斷仕兼
候場合も不少就而者兼而申上候通り亜國公使假館
之儀者建方早々濟可相成有之此方ニ而被振廻
可仕候義之趣被為成度旨説明之仕方ニ可有之候事存候
尤二件横濱表騒立之折柄搦重催促之儀ニ付
御遣之廉者神奈川奉行ニ而相断中上候趣も有之候ニ
付而者私共兼而心知之者ニ付此方之至の見込ニ候歟折柄未夕御
不申彼方之も短疏未差向候折柄之上行有之候由ニ付此上
償金等申上置候勘合も無之不致存待又未タ件小笠原注

民之儀ニ支那向並ニ節戸運賊ニ願様私意組之之もの
より引合無之趣ニ有之尚唯今急角ニ清国ニ差
越之被俘者ニより今一応引合ニ方ニも一ヶ條ニ於何
是ニ手続を以来出し総還一雑駁清国ニ被置候この
並年存ニ海文償金請求之一方之件並先ニ設英国より
ニ有之最初申立候打拘清国申拒ニ成彼是手返ニ
内軍艦等差越ニ手諸之談判ニ至り候迄ニ莫大之
償金請求者し相成ニ付清国政府之対し不申ニ付
清ニ於ても合中達ニ無之南部ニ於打合之人心ニも愈
居響候姿ニ而亜国始之者相分り候様亦々差加

此一ヶ條互ニ對話之上仏国公使申立之趣ニ清ニ座候ニ付
絡末ニ至り候而御相ニ至合之次第ニ難計且千節ニ而
都合ニ相成候得共既ニ申立之長崎ニ發砲し候ニ付申諭
候商船ニ償金早ニ相渡し候而彼我之隣理ニ
無之内ニ清人ニ裁判ニ相成候得共彼是延引ニ相成之土人賊
候ニ助ケ清之座之先来書翰ニ之證説迄長崎ニ一条
其からこ語句此方清ニ都合ニ陥り相成行可申哉と深
く憂慮仕候得共在留公使之儀ニ前申上候通英国和
親ニ相成候而吾賊居ニ助之如翰證之説申唱ニ付以
之分ニ被存候仏国人事神奈川表商人之儀方ニも

何様ニ而筋之儀も有之候ハヽ当此度使節彼国へ被差
遣候序を以右等之様ニ彼国政府へも談判ニ及ひ候事
情親睦仕候存候得共彼国人之不所致ニ而生し
候ニ付而ハ勘合無之抔之変故ニ至り候儀も前段之
趣意を基とし之事情ニ而撮之候返翰案ニ而相添入
御覧候右ニ而御思召も無之候ハヽ至急次第本国
政府諸之談判向ハ筑後守伊豆守へ被仰渡候様仕
度奉存候此段申上候以上

亥十二月

竹本甲斐守

菊池伊豫守

小笠原摂津守

田村肥後守

池田筑後守

河津伊豆守

柴田貞太郎

二百七拾六番

亜国公使へ之被差遣候返翰案

亜米利加合衆国ミニストルレシデント

エキセルレンシー

ロベルトエッチプライン へ

貴國十二月廿二日附第百二十六号之書簡落手致申
候趣逐一領承候右件善福寺焼失之儀ニ付云々
被申越右者全前掲書簡を以申入置候通ニ而我
國奉行より委曲之事情説明及ひ置候ニ付既ニ許
ニ而了解可被成義ニ付当日仮令本國政府より
申越ニ而趣有之とも全許より弁明ニ而被致候ニ
付何所承知来書之趣を暸悟ニ至ニ而一件和親之
條約を結ひ互ニ信義を以表を合論ニ至ニ匹徒を唆
誘し火を放たしめしとの疑を全く我政府
を卑視せられし事ニ而あるまじく哉尚我國

国人必竟角ニ不穏旨を人心ニ向指ニ従ひ我王より
変を招んとのことなれとも於両国之為ニあるべくもあれども右
候處折角和親を結ひ甲斐もなく我等が是迄之
苦心も虚しくこの成行を残しみ心配ならさる
ところ御諒察不被成候追而被申越候ニ付てハ我等よりも心
外之至ニ不能候を被申立候通り償金差出候義ハ許
疑惑之臆説を実事ニ立し勅令ニして此方政府之
恥辱此上もなき次第なれハ御拒被申候様決而
申遣しかうし勿論本政府よりも厳命之
上許かまへ要被致候廉ニもあらハ今般本

國への差支を便宜に委細引合ニ可及存候ニ付江戸表
公使仮館寺院之儀を既ニ手当ニ命せし趣もあれハ
追々建築之運ニ可至処と存候次ニ横濱表之
儀を同所奉行ニ命し其事情を可承調これハ今日
迄之具儀を能々聴候ニ及ふといへども当時中
同所人心一時騒立候折柄之事ニ付多少之行
違を生し我国民而已ニ猶之振舞ありしニ而もこれ
貴国おゐてハ此方之其の強而負債を督迫せしハ
其方之民の要件を拒絶せしにてハあらさるや既ニ貴
委細之調ニ至ハ粗細敷に及ひ来件ハ然も京為任民之儀

も此迄往復を始としかま之事実徹底ニ致さ之上ハ
手助ニし其のより委曲ニ可及陳述ハ来書中請求之
趣其意ニ副ふ能ハさる事之毒を致存候之道理之
所其要旨前書ニ述る所ニ懇ニ諒察有之度ニ来書
大城其上之折柄焼失ありし彼是手数を経ふ可自
然期限を失せんことも必然ニ候し畢竟此段返答ニ
及之以拙具ニ詳言

文久三年亥十二月 日

水野和泉守花押
板倉周防守花押
井上河内守花押

正直之ヲ収領シ同列ノ商議此返翰案ヲ可也ト決シ
施行スベキ訖ヲ外國奉行ニ指揮ス奉行其旨ニ随セ
同十日ノ日附ヲ以テ神奈川方ニ達シ同所ノ公使館
ニ贈ラシム公使已ク請求ノ叶ヒ難キヲ憤激セシカ
リケン同十五日左ノ書ヲ来タス

有馬遠江守花押

亜国公使より差出し書翰蘭文和解

第十号千八百六十四年第一月二十日日本神奈川合衆国使
臣館ニ於て

水野和泉守
板倉周防守
井上河内守
有馬遠江守　台下ニ呈ス

我合衆國大統領の諭告に従ひて請求せし償金を
拒まるゝ台下の書簡を余謹て落手したり
台下余と商議せる事なく信書の道を絶つ事ニ付
余ハ驚愕と心痛とを速に報告するなり
を拒みをなせし要の道理ハ甚く当然なれは○正
直ニ事を要求するは其國の不面目ニもあらす又
恥辱ニもあらす○之彼此の如き温和なる要求ハ

英國使臣館の士兵を殺害せしとき台下手ら償金を拂ひし一件と日を同ふし難し此の如き償金ハ懲戒すへき事變に於て手ら政府當務の任を為せし證據にあり又台下の命に因りて之を犯しゝ證左及英國政府より詳述せし書函の寫しを余大統領へ贈れり○故に台下余か疑意と云へる所のことは此年日本に於て惹起りし殺害に觸れつる懲戒すべきなる事變の證左と詳述及右なる事變に就き英國政府の之取扱振を合衆國大統領にて勘考するため充確然なる證據となるべし

大統領の決断ハ熟考の上にてなしつる事なれば之を變し或ハ之を止むることなかるべし故に余此請求に就てハ金高の定を止て次件を台下に告るより外要無し若し此後再ひ請求を為すときハ台下の合衆國へ仕向つる失費及ひ景況に從て此定りつる金高を增加し此失費ハ大統領より唱へつる決定の故を以て右請求を保護するため要用なるときは合衆國の兵勢を増させるため致失費なり

余又次件を台下に告ぐるハ余か職掌なり即ち此る

件を変更せらるゝは合衆国の大統領より余に命じ
これバ台下の云へるが如く此事を簡約に華盛頓府に
於て談判せらるゝものならバ便宜の条例に戻まり仮令該
ことを拒まざるとも此の如くせられバ大に時日を費し
不都合なり
余台下に忠告す我政府の変議今台下の書翰中に
所述の意見を改るまじくハ合衆国へ使節を差出し給
はざるべし
次件を台下に告ぐるに亦余が職掌なり台下余が
忠告を用ひずして使節を出し欧羅巴より使命
を発しなくも使節を合衆国へ差し給ふとも余が
命を請て此請求を保護せらるゝために施すべきこと変更を延
引せらるゝ為めにハならざるべし○且又若し日本に於て
我国の法及び我国人の正理を保護せらるゝ為め兵威
を用ることを要用なる事件指起るときハ余ハ右の
命を待ずして余が方々の全権を以て支那海にあ
る兵勢及米本国より命令の下る前当所へ来る
せらるべきが勢の兵威用ゆるを余が職掌と思ふべし
合衆国政府ハ注意して條約のこと極て守り此ま
ゞ我政府の召さる求交誼を害せらるべきことゝハ如何

斯の事柄にても之を避る事あり○故に大統領ハ其臣
民も同様懇親の意を以て待遇せらるべく且之を勧め
に従ひ其強盛なる海軍を指向けさるは大君殿下
の政府の政府能く篤く之を行ふべしと信せり○
此の如きは日本の面目にして且大君殿下の政府ハ
強暴の要求に及ばれしことを以て背かさることとなく
して道理に従ふ用意をなしたる證を表し実に政
府の為め大切なることなり○台下の拒まるゝ由にて諸外
國ハ其臣民の為に道理を得られ且各國ミニストル
の建白も日本への港へ強盛なる海軍を留る間にあら

されども重大のことゝ思はざる所以を得ることなり
余又台下に次件を回想せしむ合衆国政府ハ貿易
及居留所の為め大坂都並兵庫新潟港を開くを
延引さるべき説を求めて承諾せしは方今よりも此承諾を
全く元に戻し合衆国ハ日本との約束に従ひ右の都
港を今般開きたまふ積りなりと條約済各國へ報
告せらるゝは為に十分の道理あり恐惶敬白
日本在留合衆国のミニストルレシデント
ロベルト エッチプライン手記
同十九日譯成テ正直ニ進達ス却説外國ヘノ使節弥

発遣ノ決定アリシカバ同廿四日ノ日附ヲ以テ左ノ

書翰ヲ贈達ス 往復書翰書留中日附廿日ニ作リ次ノ二通モ廿三日作レドモ子ノ正月外国奉行建議中去ル十二月廿四日附ヲ以テ彼方本國ヘ御使節被差出候ニ付云々被御遣候御書ヘ對シ尚縷々雜論申越候トアルヲ以テ考フレバ廿四日ノ日附ナリシハ論ヲ俟タズ旧記中日附ヲ改正スノ間暇ナク旧ノ儘ニ存セシナルベシ旧記ト對照シテ日附ノ違ヘルヲ審シム事勿レ

亜墨利加合衆國ミニストルレシデント
ロベルトエッチプライーンヘ
エキセルレンシー

以書翰申入候我國内鎖國之旧習不一変せさるに當て物論不穏より人心兎角に折合兼國内騒擾およひ候事情ハ其許にも親しく見聞いたさるゝ通にて人心折合方殊難因一にて候種々心を尽し候ても以之外来とても功験を奏し不申迄ニ至らず貴國へ對しても長崎旅にて私預人殺害せし事件有之和親交際之情義を失ひし次第にて我政府の憂至を正理を得さる事ゆへ存念を懇悃に陳へされハ此段

大君殿下か特に使節外國奉行池田筑後守河津伊豆守目付河田貫之助を選定せられ都府にて貴國と是迄之約定を主とし始末書翰の意味

を定まへきことあらざれハ親しく其政府に陳告し
且我國内人心鎮方之方便許多之生霊を害せん
しを両國和親交際のこ永久全からん方略當方明け
談判及へく尚右之趣貴政府へ委許より委曲被
申立旁談し一度此段拙者共より具ニ陳言

文久三年癸亥十二月　日　水野和泉守花押
板倉周防守花押
井上河内守花押
有馬遠江守花押

同日在留荷蘭國コンシユルゼ子ラール兼ポリチーキアゲントドデガラーフファンポルスブルークへ
モ同文ノ書翰ヲ達ス又亜國公使ヘハ左ノ書翰ヲモ
副ヘタリ

亜米利加合衆國ミニストルレシテント
ユキセルレンシー

以書翰申入候善福寺焼失于今之儀有償金高之儀
云々被申越右者銀隠も有之事故略答申入委細之
儀ハ尚可申入積之處同人も既に出来翻譯等も成可
と去らさる内尚再答被申越右ヶ件談判之儀ハ
中内便節之儀周旋被致可致ところ之趣被申立

懇親之間柄右様之儀者有之間敷筋ニ被存候
何れニも別紙申入候通厚く其政府へ被申立
度候拝具謹言

水野和泉守花押
板倉周防守花押
井上河内守花押
有馬遠江守花押

先是善福寺焼亡ノ後亜公使横濱ニ滞留シ屢府下ニ歸留センヿヲ促セドモ未ダ假旅館ノ設モ無ク加之暴激ノ兇徒潜匿出没ヲ定メズ如何ナル不測ノ變アランモ圖リ難ク旁歸任ヲ許サヾルヲ憤懣シ士官ヲ具シテ出府スベシト悃願ス然レドモ未タ其設備モ無ク且暴發無シトモ認メ難キヲ以テ左ノ書翰ヲ贈リ出府ヲ止ム

亜米利加合衆國ミニストルレシデント
エキセルレンシー
ロベルトエッチプラインへ

以書翰申入候然ハ貴國士官當所迄連越らるゝ趣此程も被
出張之我國奉行へ申立られし趣兼承せり右
我國奉行よりも方今都下之景況暗中へ迄し

通り之次第ニ候

大樹公上洛有之候ハヽ別而戒心を加へ警衛も一層
厳ニ致し兇徒死常を暴發致候も難計候ニ付余等於
ても憂慮不少候ニ付顛辞之方略等力を盡さんとし候
へども未た兇徒剋定之所ニ至らさる所打払都下進
歩等ニ及さハ今不安之紛紜ニより激發之極殊
をなり却而御抗之変事出来ニ致し難計ニ付之
時宜之廣く是迄余等苦心も一時ニ瓦解ニ及
ひ許之夫ニ国と交際懇篤之周旋致居候在留人
之上夫方ニ我国内之事情も兼而承知致候ニ付方国事
之多難ニ付而ハ国より回慮ニ付被致候其許識盡心
竭之事ハ存候尚此節之出府ニ付一時致仕人会候
相談致度此段執事ヘ以御具謹言

文久三年亥十二月　日

水野和泉守花押

板倉周防守花押

井上河内守花押

有馬遠江守花押

如此詭計ヲ設ケ内外多難ノ虚ニ乗シ拗執シテ自己ノ存念ヲ立ントスルハ實ニ憎ムベキノ限ナレバ去ル十五日進出ノ長章ニ對シ彼カ狡黠ヲ責メ疑ヲ氷

解サセシムルハ勿論ナレドモ其所謂三件ニ渉レル中ニモ殊ニ證跡掲焉ナルハ小笠原罪人ノ事件ナレバ今一應岡士ニ面會シ島中ニテノ顛末ヨリ最前横濱ニ罪人ニ人連来リ附度シタリシ應接其時ノ結局ニ至ルマデ順序ヲ次第ヲ辨駁ニ及ブヽ今更反覆ノ曲說ヲ立ツベキニ非ズ然ルニ當五月其談判ニ及ビシ松浪権之丞ハ洋行シ林和一郎ハ長崎奉行支配定役ニ轉シ長崎ニ在勤シ今残リ在ルハ中濱万次郎一人ナレ共既ニ其事ヲ小笠原島ニ於テ裁判ニ及ヒシ小花作之助歸リ居ルコソ僥倖ナレ此ニ人ヲ横濱ニ遣リ丁寧反覆說シムベシト決議シ勘定奉行監察ヘモ商議ノ上申稟書ヲ作リ浄書成テ奉行各連署シ同廿五日正直ニ進達ス閣老ノ異論モ無カリケン即日書取ヲ以テ其事ヲ許可ス其上申ノ書案左ノ如シ

小笠原島ゟ連来候罪人之儀ニ付亜国コンシユルヘ引合筋之儀
申上候書付

書面伺之通可被取計候
右者保渡守兼而[illegible]
亥十二月廿六日
外国奉行

勘定奉行
外国奉行
杉浦兵庫頭

先般小笠原島ヘ鯨漁御用ニ付越後國蒲原郡村松濱百姓平[illegible]廉藏不[illegible]雇ニ而江川太郎左衛門[illegible]鉄炮方手附御普請役格中濱万次郎儀右御用

被仰付同島へ在越島民之内鯨漁者心得候外国
人共六人雇上ケ近海鯨漁者済同島へ立戻候節
右六人之内ウイルレムスミスと申者の者組中盗を致し
候ニ付荷物を押へ瞑ふ其者候処一下先上陸致し望
殺害為致ニ付チヨーンホーツンと申者の申合荷物を戻
方ニ短筒へ玉込等致し不在直候ニ付妨け候者を寺
之候心組之為本取へ在越候處要事縁り候處右筒ニ而
落し候より相騒ぎ居候状ニ付右雇ひ候外国人共之
申口等為分明在越候者右捕小笠原島在島罷在
候者の一同申談之上支配同心其外人減小人目付其外人

附添横浜表へ連来犯科之次第コンシユルへ右三人之者
分ケ引渡候処手渡右ホーツン外申立候趣も有
之候ニ付猶連来候者へ再応談判致し度旨コ
ンシユル申立候ニ付右三人之者横浜表へ召連及引合
候處犯状之譯柄コンシユル於ても分明ニ在候ニ付
夫之處置可致旨渡引合済候ニ付可取計旨申答
候ニ付引取候趣ニ而處置候故右ホーツン儀罪科ニ而之
候ニ付右為見分且子孫並ニ右價之不相当同島ニ罷
残し候ニ付右島へ備置候度存もニ而之候得共
無謂ニ付候趣之書類ミニストルより差出候儀ニ付

言前ヘ被差出候共一冊ニ相認書籍ヲ以テ申上候ニ付而
速ニ差支之配向之者ゟコンシユルへ引合候儀ニ付書翰
ヲ相認仕子供並ニ為價之荷物等更ニ無之候處
相渡候而ハ彼是並ニ縺出来候而已之儀ニ付徹底ニ而
仕候留前書支配向之者横濱表へ差出候ニ付
コンシユルへ引合候得共差押へ談判ニ及候而ハ方可然
奉存候留を以コンシユルへ右之国事ニ付申出候
相成可仕候ニ付此段申上候以上

竹本隼人正
竹本甲斐守

竹内下野守
菊池伊豫守
小笠原攝津守
田村肥後守
杉浦兵庫頭

許可ノ指令左ノ如シ

覚

伺之通可被取計候事

就右岡士ヘ書翰案ヲ草シ翌廿七日正直ニ進達ス其
書左ノ如シ

在加奈川亜米利加衆國ミニシュル
ジヨルジ、エス、フ井スセルへ

以書簡申入候我小笠原在住之貴國民ジヨーチ
ホーレツン儀罪科有之ニ付我士官之者同島ゟ連
来り右殺害之許へ引渡せし處右之儀者許へ
為引合度候旨之段右士官之者ゟも今日当地へ
着いたし申出を存候旨此段被心得度候謹
言

文久三年亥三月廿七日

竹本隼人正
竹本甲斐守

菊池伊豫守
小笠原摂津守
田村肥後守
柴田日向守

同日一覧済下返サレシカバ同心堀紋治鞍馬ニ乗テ神奈川ヘ携行亜國公使ニ逓與ス斯テ作之助ヲ始中濱万次郎小人目付原又吉ニ横濱出張ヲ命ス倶ニ小笠原島ニ在リテ此事件ニ関係セシヲ以テ也同二十八日三士發向横濱ニ至リ同二十九日同所岡士館ニ於テ應接ス此時通辨ノ為譯官北村元四郎附属ス期

二臨ミ公使モ来テ此席ニ列リ双方ノ對話ヲ聞ケリ
其對話書左ノ如シ

挨拶畢テ

此程我國奉行より申入置し亜人島より連来
りしチヨートツホーレツン之儀者引合之上免江戸表
より政府の命を受け候義ニ候

兼而承知致し候

右者ミニストルより前老中方へ差上し書簡中ニ
チヨーシンホーレツンの羅科中濱万次郎より筆受人候
旨を以コンシユルよりホーレツンへ申渡せし趣承れど

素より亜人島より連来り引渡候趣之儀ニ付
此方而ゆるく免せし後又更ニ亜ニて召捕之次
第ニ右從申立ら遣し哉

右前万次郎と同行之来りし士官の姓名を
何と申され候哉

松浦權之丞ニ忠兵衛一路上申亜の二候得共一人亡歐行
以後し候之の上ニ既ニ今日ニ於へ参込一人亡長崎
表へ在職居候右者代り亜人島の事情相心得居
候そ而亜人立職候條ニ有之候

此時ミニストル手筆ニ立出す

先達て松浪様を以テ万次郎江被下候ホーしツン
候處極老之儀ニ付而ハ彼島ニ罷在中(ホニテ)泥甲
於ても紀命(三度テニ)有之候ニ付候者筆免し候ニハ如何
ニ付万次郎へ尋申候處右友人ニ士官并ニ一万
次郎ニても篤と免ん候ニ付一ケ年勉中依り候而直ニ敷免
申渡候得共右者万次郎義ニ覚居り不申候
哉
此方於て書付免し候譯ニ付無之引渡セし
事ニ而御様ニても一ケ段合ニ罷出居候後ニ有之ニ付
コンシユルニても便取次第亜国サンフランシスコへ罷越し

商館へ入置つ申旨申聞ラれし候ニ付無之哉
手前サンフランシスコへ一ケ年ニ積候處商人共の地
西洋諸国ニても無人島へ罷越候ハヽ同島へ参
住致し度旨ホーしツン殿ニ頼ミサンフランシスコ
ニ差し候譯ニ付右様兼候儀有之
手持候ニ付千二百弗余有之ニ付右乃亜人セームスメ
スニ申し置候ニ讓渡せし候ニ付右手取候由
人候鯨漁の為免人相雇給料貸越候旨二十
五ドルラル宛人為ニて万次郎へ罷居しニ付毎
右地代ホーしツンへ相拂候故者ニ付候通セーしムスミメ

又申ツ候儀も有之殊ニ一万ドル頭へ罷出度候得共
文候趣右地所を以右トルラルニ代り二心得呉候様
之書面もミメスより罷出候儀も有之且又ホーレツン
不相済し言價の不物無之人為へ罷残無之候畏れ入無
取へ無組日本地へ右鉄候節ホーレツンの居宅へも
連鉄家具等石纏め取へ積入候儀も千節し
布団一通りニ夜敷等入有之候椹一ツ拾鉄も余
残し無之候品丈ケ摂附升一ツ日記一冊航海書一
冊水呑一ツ千分新わつ紙有之古衣をセーレムスニメ
スへ添し候儀承知為済し候得共千分何を以言

價之不物を被申候哉且又同為ニ子供を多く
相居候趣ニ有之候得共ホーレツンも単ニ有之妻子等
無之の由之譯ニ候哉
ホーレツン妻子共不足とも凡價弐千トルラルニ相成趣
ホーレツン申立候儀有之且子供之儀ハ實子ニ無之
無之只ホーレツン二仮親ニ相成子供有之候趣ニ候
然らバ右子供ヲ相欠ト申者の子供ニ有之哉ニ一旅
人を相殺ニ人ヲ以テ玉込等仕候而し候間を携
へ来り候ニ付老人ニ相成バ千死軽キ事ニ候哉右様
之訳ニ無之儀と存候

此時先達テ渡し置し口書並始末書共採出しコン
シユル並万次郎互ニ読ミ合セし上ニテ
万次郎ニ申候ハ右許ニ於テハ卿も不直ニ廣等ニて候
右ニ付コンシユル於テも兼而亜国政府ゟ被申付候
日本人と亜国人との間ニ生し候事ヲ取調ヘ候
事ニ罷在候之次第吟味致し裁許致し候事を相ミニストル
聴届之上閣老中方へ申上候次第ニ有コンシユル万次
郎ニ於テハ少しも不行届之儀無之段ヲ申越
此上ハミニストルを閣老中との断決ニテ仕事ニ候
宜早引合ニ不被及候ても一ツ之異義ニ候間其旨を政

府へ被申立候ニ付被成下度候
ホーツン儀我コンシユル方ニテ一ケ月二十二トルラル宛夜
食の失費掛ニ候儀ニ有之候
袋澤家并地所とも以前百五十トルラル為出し
ツン買入し處日本政府の権勢を以て五十トル
ラルニテ買上られ候趣ニ有之候
此時ショーチホーツン呼寄セ尋ル
右家地所ニも何年以前右處ニて買入候哉
十ケ年程以前買入候儀ニ有之候
手後住居も不被應根手而急し大破およひ地所

之候も耕作等ニ致シ候十ヶ年も相掛ヶ候而荒蕪
未生長り居候場所ニ而荒果居候事ニ付五十トルラ
ル位ニ而御取之旨申談候處右ニ而ハ安直ニ買上
呉候ホーレツン申ニ付候而ハ無據ニ而買上候儀ニ有之候
候
（ホーレツン云）百トルラル與へられ無人島へ遣すかへこれ有候ニ御座候
存候之候
此時コンシユルホーレツンニ對ひ右取計之儀申可爲合申渡
罷ありて召捕へ當地へ連来り引渡せしニ付人何
之所ニ而トルラルをしニ付候ニ而是ニ而甚取計之候人

雖未致候南方ニ而ハホーレツン并二人スメニ而も何迄
も国法之罪科とおもわれ候得ともミメスを四ヶ月
之入牢申付候處ホーレツンハ手罰も無之免せしハ
素より不當之節と存候
右無人之死科大ニ相違ニ而之儀ニ有候
其相違之次第柄何之取計ニ候哉兼而度候
右無人之儀を吟味相糺ニ候處ホーレツン悪事ニ而成取計
之儀相見ヘ不申候得共平生之取計極悪と云ひ
旁右取之悪事目論見候ニ付ミメスを不被存候ニ付ミメ
スハ手を罷在之を被致し候而四ヶ月入牢ニ致し上ニ而再ひ

日本へ渡来雖致旨申渡候
只今一刀ニ及ひ致斗候而ハ御印も不遂ニ付厳しく候
無之上ハ変之ニ付其投を被申出候ニ付遣無之武
器取揃候様ニ致置候
悪事を為し候所シメスニ荷物を取戻し候ニ付
しツン候以置候を掠奪荷物不渡妨け
候ものを打殺荷物を取是を配分いたし掠奪工み
し候シメスも死囚し候事ニ付夫々証人等も連
判在島人之口書等差添御屆之儀も無之ニ付
変無之遣せしハ不都合之儀と存候

右證書之通在島之者共のホーレッツンを追出さんかため
企候事申出候儀と存候
右之在島之者共の相似を為る申出候儀ニ付無之ニ付ホー
ツン並シメス両悪之次第相顕さ召捕候て日本地へ
連戻しコンシュルの裁断ニ相任候方可存寄ニ候然処申
出之趣島民一同へ申諭し候処右ニ悪事ニ付候
を場所打殺候而も宜候島民申出候得共我国
之管轄ニ属する者の為召捕候而も打殺し
候儀ニハ及間敷申諭候處銘々兼り訴候次第
在島の者のうち候條を退させ候儀ニ有之右之

信用不致候得共何を以證據と不し正當之取計
を為しおりといひし万次郎并士官之者共疑ひ
雖ホーリツン之申條を信用被致候儀も相聞え候
左様之訳ニ無之万次郎之所計未素より正當
ニ而候得共在島之者の證書并口書未信用不し
かこく候
左様之儀ニ未無之右證書并口書等たしかなる譯
而右者を不押へ先達て手を許つも申談引渡しおりて
儀ニ而其許ニても兼て知ろし上ホーリツン并ミメストとも改請
取候儀ニ存候然るに右を擔不らさる様ニ千含至

り被申聞候得共万次郎未おのつからふニ而計之
筋ニ成行候訳ニ候
万次郎不ニ而彼之筋未変ル無之是迄之誤判
ニ而コンシユル万次郎の間ニ而引合未事足り候儀ニ候
此上亜國ミニストルと閣老中方との談判ニ而相決し
候事ニ候
然らハ前件之次第委細申立其上ニて政府
之命ニより引合ニ可相越候間被心得候様致
度候
兼知致し候

右ニテ退散

此日ノ應接對話ノ如シ未タ十二分到底スルニアラ子ド後日ヲ約シテ一同帰府シ奉行日向守柴田剛中ニ顛末ヲ復命ス 翌正月二日對話書ヲ進出ス 先是去ル十五日亜國公使ヨリ進出スル所ノ再度ノ復翰種々ノ辭柄ヲ搆ヘ已ガ意ノ如ク數件ノ償却ヲ貪ランシトノ胸算ヨリ事ヲ左右ニ假託シ一向ニ本國政府ノ下知ナリト募リ期限ヲ定メ兼諾ノ回報ヲ督促ニ及ヘル其原因ハ假館ノ燒失ヲ怪火ナリト狐疑シ横濱商工ノ者等ガ負債ノ催促ヲ暴戾ナリト難ズレドモ彼ヨリモ短銃ヲ差向ケテ無法ノ應對ニ及ビシハ神奈川ノ糺明書ニ判然也加之小笠原島罪民ノ事件罪狀明亮ナルヲホートッンニ欺レ不所謂請求ヲ為スノ數件今遍ニ彼ガ曲説ヲ辨駁シ正理ヲ明確セザレバ必後日ノ害ヲ引出スベシト一通ノ上陳ヲ作文ス

亜國公使可差遣返翰之儀申上候書付

外国奉行

亜國公使より去年前横方宛書翰一封差出候旨被對翻譯為仕一覧仕候處先般右公使より長文書翰を以善福寺燒失其外神奈川表事件并小笠

秘魯羅民之儀ハ本國政府ゟ申付越候趣を以償
金之儀申立候得共以之外ニ付之を助ケ清國商一ゟ
相成儀ニ無之清庭候ヨリ一應清書翰を以清辯解ニ被
成置候處尚又不兼允之旨申立候儀ニ付右二件
者兩君清國遣翰之趣ニ十分之清理相有之候得
別ニ被仰合ニも及ひ申間敷左候得ハ拒絶
一存を以軍艦呼寄せ可申又ハ西港閉市之儀等
申立候ニ付清國ニ無之接清事情ハ兼而承明ケ清説
諭も有之候得共何分彼ニ熟知不致主張候要領ニ而條派
ニ相渉り反側ニ付増儀ニ付候間使臣館焼失後

清措置振ニ付清足之廉ニ有之慣激之余り萬一
向清国難之儀を致ニ中無之候得ハ右之儀ハ
不法之儀ニ付一之清説諭ニ成可然旨右相葛藤を
生し候上ハ清殿ニ而相申募候哉ニ難計其
都度之清書翰を以被仰置候ゟ三吾ニ従ふ
紙上之往復を重候返翰諾り彼ニ而し之情実模
通り兼候事周圓之見据ニ無之候而清之前
振方之内彼地へ清ゟ張す成前四清返翰之清ニ無
意を以篤と清説諭ニ成清ニ當之儀ニ付ニ有之候得
處置相清ゟ都合之儀ニ候ハ其事寄之内被萬一

候主意柄行違ひ被存候へ共以て彼方疑念も氷解
仕候通例相省キ申哉ニ奉存候儀ニ別紙之通
翰案ニ而調候辨駁ニ而成廉ニ巨細ニ而調別紙ニ
添此段申上候以上

亥十二月

竹本隼人正
竹本甲斐守
菊池伊豫守
小笠原摂津守
田村肥後守
池田筑後守
河津伊豆守
柴田日向守

亞國公使へ可差遣候返翰案

亞墨利加合衆國ミニストルレシデント
エキセルレンシー
ロベルトエッチプライーンへ

貴國第十二月廿一日附第百三十六号之書翰へ我
十二月十日附書翰を以回答およひし處右復答と
して尚又貴國第一月二十日附第十号之書翰ニ
手を意を餘兼せり我國鎖國之沿習深痼ニ成

今に至るまで屢変致し難く不都合之事とも
有之我等毎に憂慮せさる不能此度申越候件とも
畢竟人心不折合之景況を常に見聞致し居候
より疑惑を引起されし事と察しぬれども善
福寺外交件とも前回に弁駁およびし通りにて情
実に相違無之して弁駁之云々只管交誼に障り信
愛之道を破るる抔申聞らるれども此方於て敢る
其許之需を拒むの意にあらされハ互に思ふ所同
しからざるより疑塊氷解せさる事毎に有之前
回之陳述ハ則ち其許之疑惑を解き度為免人高議

を尽さんと欲する趣意緊要なれハ彼是之隔意な
く復論有之候処我差遣す使節待遇方并都府港開市
延期承諾之義も実く差含み候始末のみの縁に軍艦
不差向内ニも其許等申立之趣重大之事件とも不心
得抔被申立候由先般長州沖於て貴国商船ニ対し
発砲せし一条に付ても其許求に応しかたき儀も有之
事を大小理之曲直に兵威を動さんとするにあらさる
既罵し回想有之度兎に角事情透徹不致候ても自
然交際上ニて差置きかたき之論合ニ至り可申哉心痛
致し候に付余等因晴之上委曲を尽し談判に及ふ決

掌ル事ニ有之其役筋之者ヘ能ク備サセ申含メ其
地ニ就テ談判可為候尤其旨被心得候回答如斯候拝
具謹言

文久三年亥十二月晦日　水野和泉守花押

板倉周防守花押

井上河内守花押

此晦日ノ日附ハ来ル亥ノ正月四日施行ノ命令アリテ
後書加ヘシモノナリ其ハ次ニ云フ正月四日ノ條
ニ詳カナリ

此辯駁ニ應シ

第一件

一大君殿下ニハ不在中ニ江戸ヲ退去セラレシト云ヘリ

此儀對話書等無之ニ付テ右様談判等問合ニ及ヒ

文ヲ通シ談判段々ニ相違無之旨申聞セ

第二件

一横濱ニテ引宅ヲ據ヒ多ヲ以テ余リ入費大ニ增セ

故之ヲ為ニ生シ諸雜費ハ日本政府ヨリ拂フベシ

ト述ヘリ

此儀該對話之節申立ニ儀モ有之對話記等有之

ニ付全ク右様之說話仕候者無之全證柱ヲ說ニ出シ

ヲ奉存候

第三件

一第四月六日以下善福寺焼失之義ニ付去ル六日申立
之事

此儀對話書等無之候得共年人正ト公使横濱表ヘ
退去之儀種々談判致シ候得共何分不遂討ニ有之
併彼方周旋ニテ先ニ週日程横濱ヘ可罷越との儀
申立候段右通リ無之且ミニストル館場所替之儀
年人正申出守ヨリ申入候趣是又相違無之候
尤公使住居遠隔之家ニ付取計之儀を恭敬懇篤
之次第ニ有之候ニ付取申立候儀ハ何等之趣意ニ候哉

全疑心ヨリ相生シ候厳情と相見ヘ其節失火之様相
及辨明不被成候事趣ハ下文申上候通リ其日時
詰合并ニ小出大和守相礼彼作来候趣ニ有之且當四月十
三日摂津守公使ヘ對話之砌公使ヨリ此段出火之
義ニ付疑惑之儀ニ申立候ニ付不意之手違ヨリ起
リ候儀与も別段怪我跡等無之旨申聞候處右
出火之儀ニ付自國政府旅ニ心得違ニ候
ワケ不且ニ因不意之違ひより起り候と信し難
段候且其所詰合役人真実ニ働候事ニ申述
並テ言申聞尤詰合候者ハ礼ニ成候由ニ付夫之

申口も可有之万一自國政府へ差送り申談候ニ
付書面ヲ以急度被下度旨申立候ニ付詰合之者
共ゟ取糺候処來書寫を添候ニ付書翰當六月九日
到達相成申候前條政府ゟ心得違有之候ても
不道有申立候趣ニ有之候上者同人儀ハ不都合
不少ニ付其筋政府へ申出し疑念氷釋致し候様取計
可申候其職掌ゟ相支へ之申立をいたし候者不相當
之義と奉存候且申立之内其朝九時頃番兵
居所ゟ外離し一少量を酌察セしむる事之儀も
真福寺假住居之儀ニ可有之右者焼失翌日當

四月七日朝公使見分之上詰合支配向より
番之爲取計候儀ニ而且同人馬へ鞍を置出立之
用意等を促セし其の段ハ其節詰合之支配向ゟ糺
候處是又誣矯之妄説ニ而一辭卒迄公使出
行仕候節ヲ彼方より其段支配向之者へ申出候ニ付
支配向之者より諸般之義等其筋へ爲申談候儀
ニ而相促し候儀を勿論此方ゟ馬支度等取扱候儀
曾而無之候
善福寺焼失之節詰合候支配向西村鉄三郎
相糺候處別紙之通申聞候

第四件

一竹本弁人申出候ハ全く一ヘ不ハ此事を政府於て勘考之
有之若再建ニ取掛候時ハ再ひ焼失せん事の恐あり
依て金を寺修ふ供へて気障なく建しむべし
然ハ何れ誰人も其意を知り以て式を考へ得さ
るやと

此儀對話記録之通寺坊へハ手当金之儀ハ此日對
話之眼目ニ有之何れ寺坊へハ手当金可被下哉之由
弁人ゟより語りしニ付彼方ゟ之趣申出候へ居候事
を奉存候當四月中同公使ゟ右寺去手狭ニ付

西應寺或ハ他之寺院ニ而相應之場所を為借仕
度旨申立之事翰之趣を以西應寺ハ一昨年
焼失其後仮建物ニ而殊ニ場所柄不取締ニ而見
苦しき貸渡方之儀ハ社節柄ハ手数も不容易之事
何れもしも善福寺焼失跡並様普請為取掛候
元日所ハ貸渡方成ハつきハ固之者法許ニ有之候
当ニ付都合可然左ハ同ハ當時公使立退所莫
福寺ハ甚手狭ニ而場所ニ而建足等為致候ハ
ニ付修元止宿所急速普請為成及ひ候事ニ候
夫ハ以其趣ハ以及應接普請中神奈川表へ為引

取極よりも談判相纏申度右ハ治定ニ至候ハヽ公邊
普請之名目ニ而は場柄不都合ニ付寺社奉行へ
御沙汰相成候ハヽ右當金ハ下ケ可被成候而善福寺
おゐても早々元形之通自普請取計候様可申渡
旨被仰渡候方可然右被仰渡相済候上ハ普請為致
向ゟ巨細之義取極等ハ善福寺へ引合為及作事
向之者ハ何程ニも據取候様可為申談於同寺談判
之模様ニ寄普請入用金高ニ見合セ差向ハ其當
金渡方等之儀も尚申上候様可仕尤右亜國公
使へハ返簡業之儀もハ下知次第取調可申上旨當四

月中申上置候趣も有之尚又同月廿八日伊豫守
於横濱表對話之砌同人事善福寺焼失後ハ談
判之次第も有之一時之權宜を以横濱御役所當分差置
得共本國政府ゟハ兎角江戸表ニ罷在候様申付候趣
も有之尤佛蘭公使旅宿之儀借受候とも出府仕
度既ニ中立候節右等ハ條約面ニ基き申出候儀且
入費其外不都合之次第有之候義とも被存事情無
余儀相聞候ニ付聞届可相成丈何分ニ而得と此節柄
ハ府内逗留之義ハ畢竟ハ懸念も有之同人住宅其
外華神奈川奉行請取候世話致し呉費不足之分ハ當

相取計候事ニ可申旨神奈川奉行へ被仰渡右合
公使共江戸表ニ可罷在筈ニ而條約面通之儀ニ付當時
空館ニ相成居候共英佛等夫々宿寺も有之候處亜
國ニ限り焼失後其儘ニ相成居候ニ付自然其國面
目ニ相拘り候ニ付右場合ニ而ハ一ト方ニ哉難計候ニ付善福
寺之義ハ兎角申立候通建方ニ相成候ニ付江戸
表ヲ驅逐被致候ニ付而ハ御趣意ニ無之無謂無據事情
ニ而氷解可及候ニ付諸向御心得之義ニ申出候處假營
治建物之儀者早々御下知有之候ニ付假住候處當六
月八日申ノ上並其後當九月七日於横濱表同公使

一攝津守對話之砌公使より横濱表へ罷越候儀
ニ付而者二月中竹本甲斐守善福寺へ相越須
有之候處公使儀も郊下住居當然之義ニ付善福
寺境内ニ而假住居ニ而も宜敷候旨出府致し度旨申立
候ニ付當節人心不折合之折柄郊下住居之義
甚ク懸念ニ付政府於テ殊更心配致し處置致し
居候折返し平穏ニ至り候ハ住居之儀可申越且善
福寺普請ニも當節取掛り候ニ付手續ニ相成候得ハ造営
出来之上帰府致し候方都合可然候旨暫時勘弁
致し候様種々說諭相加へ並候趣ニ而有之候得共一

於公使儀於下住居罷在候義ハ勿論ニテ右寺焼失
之限ニ至リ無余儀節ニ候得共其儘差置被成候而ハ
ル條約ニ違背之筋ニ相當リ同人於テモ自國政府ヘ
對シ面目ニモ拘リ候儀ニモ可有之候處只今以テ
同寺造営之運ニモ相成不申因循時月ヲ経候ヨリ
焼失ヲ幸都下ヲ擯斥被成候様心得違致シ
弥益疑念ヲ相醸シ怪火等ニ可有之抔無根之臆説
相唱ヘ候義ニ可有之ニ付同寺儀早々造営相成
是迄之通都下住居罷在候様相成候ハヽ更ニ疑心
モ相消候ハヽ、ヨリル談判向ニ都合之一端ト奉存候ニ付

前条申上候通早々ル下ヶ金被成下同寺ヨリ自
普請取掛リ候様寺社奉行ヘ御沙汰相成候様仕度義ト
奉存候

亥四月九日差出候五十八号之書翰有之候

亜公使ヘ止宿所ル貸渡之儀ニ付申上候書面
四月十日河内守殿ヘ進達仕候

亥四月廿八日於横濱菊池伊豫守柴田貞太郎
亜公使ヘ之對話書有之候

亜公使出府之儀ニ付申上候書 附六月八日河内守
殿ヘ進達仕候

亥九月七日於横濱小笠原摂津守亜国公使ヘ之
對話書有之候

第五件

一其後政府ニ而其火難を免れし所を居留所とし
て急ニ補理セしむべしと兼諾されしとの儀申立候事

此儀四月十三日摂津守公使へ對話之砌止宿所
焼失ニ付而者右替ニ居成近焼残り候本堂向
仕切致し可被渡旨申談候ニ處兼諾ニ而も無之旨答
有之右等之義を申立候事ニ奉存候

第六件

一第五月三十一日午後二時頃外国奉行松平石見守
而来て云へるには我来る所は危き事なれども政府ニ
命ぜられて下件を報告せんか為めに来れりとの儀申立候
事

此儀密話ニ付對話記等無之候得共石見守兼而合
て處浪人共彼下ニ集居候風聞有之候ニ付柄
彼下住居之者を懸念之旨一通り申入候趣ニ有之
右者閣文臣中浪人大納言石人程集り居り
ての儀ニ而政府ニ而も恐れ候の儀も懸念も申
入且政府詫く之を罰する事難ニ有べし又浪人

之朋友之間ニ於テ儀ニ不申入使臣館之人ニ對シテ
仇讐との二字ハ亂妨を申入候趣同人申聞候
公使出府之義ニ付而ニ書翰を以申立且私
共ヘ對話之砌再三申出九月七日横濱於テ提督
ヘ申立候趣を以同月十二日之書翰を以横濱表一暫
時滞在致しテ猶被御取極有之之語ゟ深く
猜疑を抱候ニ付種〻蛇足を加ヘ申立候義ニ而
未臣其後數日不レ々事〻以下ニ新徴組之者抱之
儀を側聞仕申立候義と相見候得共右ハ彼方
兼而ゟ浪人共を無數之匪徒ニ至る迄之養ひ

不成候儀ニ者無之右之内全有志之者ゟ已來之外
猶探不成候儀ニ付其臣之辨駁も成可然哉と奉
存候尤右ニ付而事柄不達無之候得共誰對話之砌
之有哉書類等無之候而者分り兼申候

第七件

一合衆國之大統領ニ其事件を兼知しあるか後ニ之
此儀善福寺燒失ニ付放火之事を程〻謳稿之
妄説公使ゟ申出しを故大統領於てゝ嫌疑
を生しテ事を奉存候テ右此段之使としてゝ被差出
候節後ゟ伊豆守ゟ右事ニ付解陳しテ以て疑念

氷解致し可申奉存候

第八件

一大君殿下政府余カ江戸を退去するを勧め候ニ付而ハ不
謂ハ無難を保たしむる為の儀申立候事

此儀当九月十四日於テ軍艦操練所亜蘭西公
使ヘ鎮港之義被仰入候節申立候趣も有之候得共
古を全く激変する心能被為在候趣意ニて
儀ニ而敢而御答成被成候得共右等之人心取
鎮方無之騒乱之事情ニ被為立候而ハ辯駁被成兼
候方と奉存候

第九件

一又余台下ニ次件を回想せしむ云々

此儀居留館焼失ニ付而ハ再建之義猶又勉強
致し当節目論見中ニ御座候得共差向仮ニ住居致す
べき丈之場所を取繕出来致し候処当七月十八日
の書翰を以て達し成居候ヘ共未た取建ニも不相成
其後度々出府之儀申立候ヘ共右懸念之場所ヘ不
少候ニ付私共引合之節ニ差出候ニ付嫌疑を以沙
汰相成候様存取計文之如く申立候儀と奉存
候

第拾件
一 焼失ニ付一万弗償金申立候事
此儀當四月十八日摂津守公使ヘ對話之砌公使
より此度善福寺焼失ニ付而者多分之損失ニ相
成申候譬へ者自國ヘ此国使節罷越之節ハ
旅館焼失等ニ而損耗相掛り候節ハ自國政府
ニ而償候儀ニ者無之候得共此懇親之廉を以補候
義ニ有之就而者右金高政府ニ而御償被下候ハゝ
直ニ頂戴仕候訳ニも相成不申一ト先自國政府ヘ
申出し政府ニ而思召之程者難相分候得共頂戴

可仕筋ニ者無之損失之高を自國ニ而相償ひ候
國政府ヘ返納仕候義ニ有之候段申聞候ニ付摂
津守申談候者此程淡路守其許ヘ談判之節猶
浜表ヘ相越候ニ付入用并焼失相成候ニ付而者金貫ひ
相掛り可申候高不取敢五千弗計唇迄可申旨申
入候右者其許被申聞候懇親之廉を以補候
事ニ有之候處相答候趣ハ右之知又償金之義
政府より申付越候ハ右對話之旨ニ矛盾
仕候
亥四月十三日小笠原摂津守亜公使ト之對話

書有之候

第十一件

一小笠原島罪人ホーレツン儀ニ付云々申立候事

此儀ホーレツン外壱人を召連帰府仕候支配
向之者共並江川太郎左衛門鉄砲方手附出役
請役格中浜万次郎相乳候處去戌十二月越
後国蒲原郡村松浜百姓平野廉蔵所持
船ニ而勘定所ニ而雇立候而一番丸中浜万次郎
鯨猟御用被仰付當亥年正月九日小笠原
島ヘ入港同島ニ而外国人等相雇立島罷在候

支配同心松浪権之丞并小人目付林和一郎
差組同三月中同港出帆同四月廿一日夕鯨猟
ニ而游行候處同島ヘ立廻り港外兄島之湾ヘ碇
泊致し候節右差組候外国人六人共一ト先
父島銘々之居宅ヘ端船ニ而右廻り候節ウ
イルレムスミスと申者一人も包買荷物等
取出し殊ニ雇中給料之償道ニも不致働方
も甚不宜候ニ付脇不差出以前ニ荷物雑
ニ而渡候處申談候處同日も上陸致し右スミ
スを同居罷在候ショーシホーレツンと申合翌朝

短筒ハ玉込等致シ候ヲ相携ヘ本船ヘ罷越
乗移候節右筒ヲ誤テ取落シ同船ニ越候者
之内シヨンウイルレム見請候処玉込有之候
ニ付直ニ水ヲ混シ其所中浜万次郎ヘ渡ヘ
出候間早速吟味有之候処右荷物預所ニ相越
若シ妨候者有之候ハヽ打殺候積ニテ右筒持
参致シ候趣ニ而遂吟味之上直様召捕即日扇
浦ニ役所ノ方ヘ連来候ニ付明家ヘ押込置食
事等為当致シ出シ置島民一同呼集候前
件之次第柄得ト申渡候処同島居留之英

人ベンシヤムウイルレムス申立候ニ付右ホーツ
ニ儀スミスミ抔ニより荷物取戻方ニ罷越若シ
妨ル者あらハ短筒ヲ以打取可申積之趣申聞其外
之者ハホーツン並スミス荷物取戻候節不返候ハヽ
打倒シ可申抔ト咄兼リ候段申出其餘ホーツン儀
兼々不埒ニ而不業等も有之事承申聞候者も有之
候ヘ共右ハ暫ク差置此段之事件ニ関係致シ候
申口而已口書ヲ取リ置右ホーツン儀四月廿九日
平野称ヘ家組セ候節大村ニ而居宅ヘハ召連
越同人之申ニ任セ荷物等悉く取纏め船中ヘ

持迄同人持地等之義もセーレムススミスと申者へ
相對ヲ以讓リ渡シ去戌正月中水野下総守ヨリ
持地相免シ候節證据ヲ渡シ書畧并繪圖もス
ミスヘ相讓リ其他同人所持之荷物等も右之
二付亥五月朔日小笠原島出帆同月十二日横濱表ヘ連
渡リ候節前件之次第柄私共ヘ申立候ニ付中濱
万次郎並同心松浪権之丞并小人目付林和一郎
ヨリコンシユルヘ為申談候處衆人等之申口とも相
違無之趣ニ而請取候間引渡候ニ而帰府仕候處
同月廿二日ホーツニヨリ申出候様ニ而有之候間

猶又今般小笠原島より連来り候士官ニ引合談候
コンシユル申立候ニ付三人之者横濱表ヘ右越尚
又當方ニ而通弁申談候處右様罪状右體も無之者
夫々罪科ニ處可致ホーレツン儀ハ帰島致し
候者領出候ヘ共其儀も難相成節ニ付亜國サンフラ
ニシスコヘ差遣し可申旨申聞候間猶又談判ニ及
も有之候ニ付相尋候處申談候處ニ而此度引合候
儀も有之間敷旨コンシユル申聞候ニ付帰府仕候處
申立候後ニ有之然る処當七月九日公使よりホー
ツニ儀ハ無罪之者ニ付帰島為致候旨書簡を以

申立候得共罪跡ニ紛シ並島民折合不宜候ニ付帰島
取計策有之旨八月七日ヲ以照会被差越候処同月十
七日右ホーツン不待之品ヲ以テ子供等同島ヘ有之
候ニ付帰島為致度若シ其儀不成筋ヲ以物品ヲ償
金請求致候為文書ヲ以申立候ニ付有罪之者ニ
為補候テ而當之措置ニ而其際ニ於生ヲ損失ヲ
償可致成不謂筈ニ且同人儀ハ単身ニ而現ニ孫
等無之趣士官之者申聞候趣ニ付照会案取調
十一月十三日差上並ヲ以テ茂ニ付之一件ホーツン儀ハ
国法ヲ以申立ヘキ相當之罪科ニ可被處者ニ

有之候ヘ共亜国貫籍ニ属シ候者之儀ニ付條約
面通コンシユルヘ引渡シ彼方ニテ處置ニ被任候儀ニ付
帰島之儀モ殊ニ可差拒可相成筋柄モ無之ニ付ヘ共
ホーツン儀罪科有之候ヲ顕然之事ニ而既ニ中
濱万次郎昭支配向之者ヨリ同人ヲコンシユルヘ
引渡シ候節罪状ヲ書記シ無之上ハ未タ罪科ニ處
セラレ候旨コンシユルヨリ申聞候儀モ有之且来書
中同人所持之商品等小笠原島ニ於テ候處申
立候ヘ共右ハ同人召連越候節盡クコンシユルヘ
引渡シ候儀ニ付申立之趣ハホーツン儀コンシユ

ルヘ對シ種々虚偽を相構へ候より嫌疑を生し
品々申立候義ニ可有之と奉存候ホールツン召連
內府仕候支配向之者共去十二月中コンシユルヘ
為引合候處彼方おゐても粗疑念氷解致し候
此書中去十二月中コンシユルヘ為引合云々ト
見ユ之ハ十二月中ノ草案ニハ去十二月中ノ文
些子循ニ似タレドモ是ハ亥年十二月七八日小
花作之助以下一同横濱出張翌廿九日コンシユ
ルヘ面接談判同晦日歸府其節ノ對話書ハ正月
二日外國局ノ囘ニニ進出ス初此草案去十二月
中ノ五字ナカリシヲ正月進出ト決定ノ後書加
ヘシニヤ文久三年亜國往翰書翰留中草案二書
アリ其一ハ前ニ掲載スル所ノ書ニテ事實精細
且去十二月中ノ五文字アリ又一ハ顛末大同小
異文章粗略且去十二月ノ五文字ナシ恐ラク
ハ前ニ記載スル書ノ原稿ナルベシ其ハ兎マレ
角マレ前ノ書中去十二月中ノ文錯乱ナラスヨ
シテ断リテ後日ノ不審ナカラシメントス尚前
後ヲ對照シテ其誤
ナラスヲ知ルベシ

先是外國奉行ノ申稟ニ因テ横濱騒動中土地ノ工商
等亜國商民等ヘ負債催促ノ顛末ヲ糺明シ詳細上申
スベキ旨ヲ神奈川奉行ニ達ス奉行其旨ニ随ヒ左ノ
書ヲ進出ス

亜國公使より差出候假書翰和解並外國奉行申立
書面共御下被成一覧仕神奈川表ヘ関係致し候
廉々問糺方一奉行運上所ヘ出張刻限之義掲載
致し其節淺野伊賀守一人役之為公事吟味掛

有之節朝之内ハ役所掛り詰罷在午後ニ至り運上
所ヘ出張致し居候事ニ有之候ニ付平常於十時頃迄ニハ
必出張致し居候事ニ而横濱地ヘ一時動揺之節鎮方
之義ニ付彼方ニ而其情実を不解只誹謗之言ニ而甚
別段申上候廉ハ無之義ニ御座候
亜国商人ロヘルトソン并スチルニス江引合候処其余
スコーエルと申立候人名ニ居留商人之内兼及不
申同国商人シヨヤと申者ニ可有之哉之旨引合之上負債等取
調候趣右之申上候
一亜國商人ロヘルトソン方ヘ借金之義之催促ニ及ひ其
上不法ニ擔出し及ひ櫛挟時計衣服ニ附候鉄
物并洋銀等盗取候段同国岡士申立候一件相糺
候處横濱本町五丁目親八郎代直助儀去戌年
八月中荻苓昆布売渡し右價之内洋銀弐百枚
請取其後残銀之催促致し候處革鞄鞋売渡
候ニ付前書品之價一同可相払旨申聞候ニ付任其意
夫々取揃持込候處内洋銀百枚請取其後数度
之催促ニ而当亥正月中洋銀一百枚請取残り洋
銀四百弐拾弐枚五十余金ニ而相成数度催促致し
候ヘ共取敢不申然ル処当三月中市中動揺之折柄

立方荷主共ゟも屡催促請候ニ付得と払方難渋
致ニ付荷主共直助方ヘ立越自ら請之及催促候ニ付金
様荷主ヲ右人召連同月十九日ロヘルトリシン方ヘ
罷越候金是非請取度旨申述候處同人立腹
致し不法之言葉を並其上足蹴ニ致し候ニ付不得止其
足を取り突倒し候處起上り寝臺ニ有之候小筒を取
可申体ニ付荷主倶々立出擔出し表通りニ外国商
館軒並有之裏道より太田町ヘ出運上所ヘ召連訴可
致心組ニ而亜商ラールメン住居後近罷越候處ロヘ
ルトリシン儀大声ニ而発候ヘ共無程ラールメン罷出

立入何ニ致し候ニ付同人ヘ相任せ置候積申置候旨但
其意ハ取候義ニ而旨申立候ニ付其節及打擲
候時計金並洋銀盗取候義ニ可有之旨再應相糺
し候ヘ共右様之義者曽而無之儀ニ而全く被申掛候
儀ニ有之段無之此上残金払方之利害[理解カ]有之段医
申立其節浅野伊賀守勤役中之儀ニ而即日岡
士ヘ対話及ひ候ニ付候金払候ハゝ直助儀は
国律ニ依り相当ニ相罰し可申ロヘルトリシン之及不
法候廉は岡士様ニ而相当ニ可有罰候旨及演合其後
四月十九日同国公使並岡士ヘ対話之節も猶又談

判然し詰り足跡ニも不相当申張直助ニて罰し方
等彼是申聞公使之見込通り罰し方不相成候ニ付
本國政府へ申出し政府ゟ之掛合ニ可致抔申募候
共同人之申聞候を以刑典を相華候義も難成義
ニ有之精々及説諭候儀ニ有之其後岡士ゟ書翰差出
候ニ付寛而申談候趣意を以往復およひ候迄ニ而
否様移無之義ニ御座候
一同國商人スチルニス宅へ掛金取立之及催促其上
右鄭致しも鉄砲打碎候段同國岡士申立候ニ付
相糺し候処石川村亥方藏佐吉儀スチルニス住居

後地平均之義洋銀百五拾枚ニ而引請内洋銀四
拾枚請取残金通り出来候ニ付残洋銀百拾枚相拂呉
候様度々及催促候へ共彼是申延取敢不申趣ヲ以當
三月中市中動揺之折柄人氣立下職之者共ヲ語作
料之催促更ニ無據同月十八日下職一同名連スチル
ニス方へ罷越催促およひ候處立腹致し一同を可
追拂と鉄砲差向け狙ひ候ニ付無余義其筒を捥き
取打碎ニ取合およひ候折柄スチルニス召仕差廻
別當等立入何れも為相拂候ヲ鎮り候旨申聞候
ニ付但其意一同引拂候儀ニて旨申立即日浅野伊賀守へ

引合およひ候処翌十九日岡士罷出ケ碑ニ而談判之償ひ
ハ差出方申募候人共右ハ國法おゐて一切償ハ差出
謂無之旨を申張彼ハいうし洋銀百拾枚相拂候ハヽ佐左
之國法を以取立可成旨申談候處兼而伏候ニ付同廿
日諸金為相拂候様可致旨岡士申聞其後諸金不
相拂候ニ付同四月廿七日岡士へ對話之砌猶亦申談
候處諸金為相拂候様先達申立置候儀之處談判
被ケ碑ハ百難相拂旨等申聞候ニ付譯ハ語り居事ニ而ハ諸
候ニ付周旋可致旨岡士申聞引取其後何等申出候義
無之候

一同國商人ミヨヤ宅ハ多人数相越諸金可受取之及
催促一分銀三百自然ニ持去候趣同國岡士申立
候一件右ハ右之處太田町一丁目大工辰五郎儀ミヨヤ
宅普請去戌九月中ヵ家作一式入手ニ而賃銀日下ヶ
之對談いたし約定書等も不取置諸職人へ入置ニ而受取
賃銀相當亥三月中迄ニ金百三拾七両弐分程も諸
下職之者へ拂方不行届然ル処辰五郎儀春以来病
氣ニ而三月中ハ別而不勝催促ニ罷越候儀難出来難儀
罷在候ニ付右柄先般之動揺ニ而市中人氣立諸職人一
同ハ十日ニ押強く催促之為怒之餘り同月十五日

諸職人相揃ミヨヤ宅ヘ罷越申談候処速ニ内金
七十五両渡呉候儀ニ而残金六十弐両弐分者追て
可及催促と存罷在候義ニ御座候ニ付前書ミヨヤ
宅ヘ多人数相越無余義及催促自然ニ金子持出
候儀ニ可有之旨再應相糺候ヘ共右様之義ハ無御座
之尤多人数相越候ニ付恐入候哉速ニ内金相渡呉候
儀ニ而及強談候義等ハ一切無之候得共多人数相越候段
と恐入候義ニ御座候旨申立候得共甚以一途之所向者同士ヘ
申入無之候儀ニ有之其段何ゝ等申立候儀無御座候
右之通ニ而いつれも無據依方ニ候ニ付申立候ニ付差還

可致積ニ有之候処今般御手前様方ヘ書翰差上候儀
ニ付前書之趣を以取調候仲間之者共委細之儀ハ私共一
談判可及旨申聞候者之可然哉ニ存候且此下ケ有之候
書翰中罷在候者を水門を作り水を乾し候仕事之棟梁
ニ申付有之候儀相見ヘ候ヘ共別段右様之義申付候義無
之候依之此下ケ之書類返上此段申上候以上

亥十二月

大久保紀伊守

堀伊賀守

駒井大学

右神奈川奉行ノ上申ニテ横濱ノ事件モ其事實貪ク

相違狡黠ヲ以テ虚偽ヲ構ヘ彼ガ非ハ是也トシ此ノ是ハ非ナリト誣シハ明亮ナレバ彼ガ書翰ニ所謂無キ償贖ヲ貪リ取ントト難論スル所ノ傲倨ヲ一言下ニ説破シ黒白判然ナラシムベシト大約内議決シタリシガ同晦日万次郎作之助久吉等ガ横濱ヨリ歸府ノ後同日亞國公使本國政府ノ命ナリト称シ馬関償金督促ノ書翰（此書翰和解全文ヲ後條ニ掲載ス）ヲ閣老ニ贈進ス然ラデダニ前ニ云フ善福寺ノ焼亡ヲ怪火ナリト狐疑シ種々ノ難論ヲ吐キ且横濱工商等ガ亞國人三名ニ負債ノ催促急ナル、ヲ辞柄トシテ故障ノ説ヲ主張シ加フ

ルニ小笠原島罪人ホーツンガ詐偽ノ欺詐ヲ信ジ有罪ヲ無罪セト宥免スル而已ナラズ三件僉償金ヲ償ルサヘアルニ長州ノ事件ヲ差挾ミ難事一時輻湊迫谷頗ル困却ス抑善福寺以下ノ事件ハ固ヨリ彼ニ十分ノ非アレバ辨論説破難キニアラ子ド長州ノ一件ニ至テハ彼ニ十二分ノ理アルヲ主張シ交親ノ違約ヲ難ジ償贖ヲ強チニ請求ス是ハ辨駁スルニ説キ示ベキ的論ナシ因テ成否得失ヲ推考フレハ今此方ノ理アルヲ募リ彼ガ非ヲ責メ壓倒セバ彼又彼方ノ理アルヲ募リ彌暴激ノ難論ヲ以テ政府ニ逼リ長州ノ

償贖ヲ償ルハ必然是所謂前門ノ虎狼ヲ防リノミヲ知テ後門ニ猛虎ノ暴来ルヲ思ハザルノ處分ニシテ遠慮無キニ似タレバ姑ク彼ニ抗衡氣鋒ヲ堪忍ビ其狡黠ヲ以テ理非反對ノ逆論ヲ責ズ曾彼ガ督促ヲ塞ソマデニ平穏ノ返翰ヲ投共シ神奈川奉行ノ説ノ如ク面接ニ徐クト説キ亦サバ自然義理徹底ニ至ルベシ愁ニ辨駁セバ後日ノ應接渋滞シ談判最モ蘊結ノ煩アルハ的確タリ因テ一時姑息ノ措置ニ因循ノ日ヲ将リ又為ス方ノ無ラズヤハト再ヒ衆議一變シ申稟辨駁ノ條案ニ書ハ進達ヲ止メ返翰案而已ヲ進出スル事トハ商議決定シタリシ也去ル十五日書翰到来同十八日譯成翌十九日正直ニ進達同日返翰検撰ノ為メ返下同二十四日草案成奉行點検各草案ニ鈐印ヲ加フ以後浄書ニテ最前ノ来書譯文ニ附シ同晦日再ビ正直ニ返呈ス正直収領同列ニ聞達ス先是神奈川工商等ガ負債ヲ暴促セシヨシヲ難ジ負債ハ其儘ニ閣キ却テ彼ガ方ニ償贖ヲ収受スベシトノ請求ヘ答フル書翰案ヲ草シ今月十四日三百三十五番ト題シ内廻ニニ出シ同二十八日正直ニ進達千正月四日下リ神奈川方ヘ達シ若泉太郎収領スト往復書翰取

扱留ニ見ヘタレドモ往復書翰留ニ其草案ヲ脱ス抑
此年間ノ書翰編輯ノ為ニヤ集綴ヲ放シテ一紙一紙
ニ編次セシ體ナレバ若シ散逸シ綴洩シタルモ知ル
ベカラス因テ于此書翰ヲ掲載スルニ所由ナシ後日
草案ヲ捜索シ追補スベシ却説モ文久三年モ暮レ翌
レバ同四年（今年三月朔日元治ト改元セラ○清同治三年○洋千八百六十四年）正月四
日旧臘晦日正直ニ進達スル所ノ返翰案ヲ交人還シ施
行スベシト指令ス奉行其旨ヲ奉リ文久三年亥十二
月晦日ノ日附ヲ加ヘ則同日神奈川方ヘ交付鈴木尚
三郎収受即魁、横濱ナル亜国公使ヘ傳遞ス返翰案前

ニアリス同日旧臘晦日亜公使ヨリ進出レ所ノ第十
八号千八百六十四年第二月五日附ノ書翰譯成左ノ
上申ヲ附シ進達ス

亜国公使ヨリ差上候書翰之儀ニ付申上候書付　外国奉行

今般亜国公使より九月前掛方へ宛書簡壱封差出候
ニ付披封翻譯一覧仕候處去十二月廿四日附を以彼方
本国へ之便節被差出候ニ付其被仰立候而書簡
へ對し尚結ニ辯論申越候儀ニ而其侭ニ閣措難
相成儀も御座候得共一応之辯駁相成候方可然
哉ニ奉存候且長州発弾一条ニ付彼方英ゟ申立候

商船償金之義尚又此段申出候右金子ハ被下方之義
を何れにしても暫く相待候様被仰立可然儀与存候同公
使より旧冬差出候長書簡之内善福寺焼失其外
之儀ニ付種々無根之臆説讒言等主張致し是
又償金を申立居候儀ニ而厚存候旧冬私共ゟ申
上候通り松平大膳大夫方急速取計之上ニ而裁判
ニ成右商船之償金も早く取決し彼我之曲直判然ニ而
取計有之度且右一条ハ独同国而已ならす外佛蘭西
國ニも関係之儀ニ而既ニ蘭公使ゟ旧臘書翰を以申
出尚申越候肥後守ゟ申立候趣ニ而尚右ニ付早く
何とか被成度並右成候様仕度依之此段簡衆議
立合後ニ申談候此段申上候以上

子正月　小笠原摂津守
田村肥後守
柴田日向守

亥十二月晦日
亜國公使ゟ差出候書翰蘭文和解

第十八号

千八百六十四年第二月五日神奈川ニ於ゐる合衆
國使臣館ニ於て
日本ノ老中ニ呈す

余本月二日附の貴翰を謹て落手したることを告し
貴國内の困難事ハ大統領預て既に能く兼知せり
日本國内の人心を鎮る為め甚盡力を施したる
を聞て大統領ハ大に満足し且余か既に台下に忠
告したる如く大統領も貴國使節へ次件を忠
告せへし即ち太平を恢復せるハ唯貴國内の政
治に関係せることなく敵意を抱き且不平なる
輩へ諸外國の固より兼計せへからさる許容を
なさしむへしとの希望を抱かしむる共之に由て
太平を恢復せへかりしとて

長州候（侯）の臺場より亜米利加の蒸氣船ベムブロークへ
放砲したるを台下心痛せらるの證を表せるハ大統
領よく満足せへしと雖も台下約束したる償金を拂
ハされハ右船主之か為日く損失を蒙るか故に右の如く
心痛の證を表せるとも大統領強て之を篤く心
得さるハ台下驚く事なかるへし
大統領ハ貴國間に最も懇親なる交を為さんこ
とを常に大君殿下の政府も同様の希望を抱け
るを兼知せるハ大統領の大に快とせる所之然れ
とも和親の基くこの根源ハ次件にあり即ち両国人

を彼國人を害せる事となく若し法外なる事の
他人を害する事となさハ害を請けたる者へ速に
其償を爲さ與へし
乱暴なる悪人ありて國法を犯すハ其國の恥辱
なり然〇不幸にしてかゝる此國法を破る者を萬國皆
是なりとしてハ唯其破法人を罰するを怠り之に由
て懇親の國へ害を加へ其償を爲さゝるに至り初て
彼の政府へ對して此政府の任を怠ると云ふべ
し但し彼政府ハ此の政府の信義を犯したるもの
なり

合衆國と懇親を保んと台下の希望せる證と大
統領能く收く思ふへしとゝ於條約を守り損害を
防ぐの趣意を欠きたり〇罪人ありて右の如き損
害を加へたりと明白に報せるハ日本の恥辱な
りとの謝詞ハ大統領能く兼て知らさるへし其所と
罪人ハ當國に限らず何れの國にも何方にもあれも
なり〇此の如き無法の変亂に合衆國の臣民
を害せるときハ大統領能く之を罰し償を排
ふべしと但その正理なり而して此の如き損害を
以前指起りたることとありて且方今尚其事なり

台下ハ好ニ通り我等よりも合衆国へ使節を送る為め十分の正理ありと雖も然れとも余共明け次件を告く此使節ハ口より懇親ありとなへる国より来れるその者ともハ随分懇親を以て待遇すへしとも雖も先達て国使節の受けたる如き真実懇親の待遇ハ請け難し其故ハ台下大統領より愁訴すへしと思へる損害を改めされハなり故に大君殿下府の證據とし報告する所と其事実の處置とハ甚違ひありて愁歎すへきことなり
恐惶敬白

日本在留合衆国のミニストルレシデント
ロベルトエッチプライン手記

子三十番
亜国公使へ可被差出御返翰案

亜墨利加合衆国ミニストルレシデント
エキセルレンシー
ロベルトエッチプラインへ

貴国第二月五日附之書翰落手書中縷述之趣逐次領解せしといへとも我方政府にて目的とせし余等之方寸を暁る事未た其同になきハ尚一二論駁せさるを得す書中第一條ニ国内不穏を政治ニ関して

るとの儀を至當之確論なれども抑我國内物情
を穩ならしむるハ鎖國の旧習人心に結ぶ所に
氷散しかたきよりの事なれバ右鎖攘の方法ハ是
迄種々商議を盡せしかど結句國論之可否人
心の向背に随ひ一時權宜之措置を以一ト先
之を挽回し然る後斷然矯揉之次第を追ふ
の外他之良策ハ有之まじと思ひぬ故に神奈川
鎖港之一事をも余儀なく其許迄申入且右等
事情各國政府ぇ演説の為使節をも差立せ
し次第に有之尤第二條長州洋船ぇ發弾に出逢

ひし貴國商船償金之儀を彼是辨論之趣も有
れど右ハ素より我國人之粗暴より貴國商人不
慮之損失を請けし事に有敢て其償金をも差拒之
右裁斷方等閑置これを可らねども畢竟外國奉行
田村肥後守柴田日向守を以申入置し次第も有之
金子渡方期限之義ハ今暫く被相待呉候段
且將貴國と條約取結ひし以來我方懇親之
意ハ渝らねと前余申述し通り國内民情于今
一定之期に至らされハ諸事掣肘之妨碍有之
と右懇親之意も十分表する能ハさるより來諭

とめく此役差出せし使節ニこそ其本国於ての
待遇方百端之事情いまた其大統領へ貫徹せ
さる事ともおもへハ是又無餘儀次第なりしにや且
我方政府の報告する處事実の處置しお述るを
者申越ましりと詐謗を以国交を保全すへき
ニ理ある事なきを言を待さるものも前条陳述之義
もく百事意の儘ならさるをも自然不都合之義も
可有之を朝暮憂慮する所なりたまへハ其許よ
り当国交際ニ注意せられし余等ニて意衷を附被
下されなハ此方不得止事情遂一其政府へ被申

通其大統領へも不悪被思取様紹介有之度右
回答旁此段申入度拝具謹言
文久四年子正月　日　水野和泉守花押
板倉周防守花押
井上河内守花押
同月廿六日右返翰案文還施行ベシト指令アリシカ
バ則本日ノ日附ヲ加ヘ即時神奈川方ヘ逓送ヲ委托
シ横濱在留亜公使ヘ傳達サセシム如此數件ノ難事
一時ニ輻湊シ政府頗ル措置ニ困却ス其央客歳十一
月廿七日孛漏生船品川ニ来リ同十二月十三日本條

約ヲ結ヒ十二月廿八日瑞西船品川ニ入津通交ノ條
約締ハニ旨ヲ促ス内地ノ事情ハ之ニ相反シ　天朝
屢幕府ニ勅シテ鎖港ノ實功ヲ遄ニ奏スベシト促
サル因テ池田筑後守河津伊豆守河田貫之助等ヲ使
節トシテ各國ニ航行シ鎖港ノ事ヲ議ルベシト命ス
三士幕令ヲ奉リ十二月廿七日乗船開帆ス先是十一
月十九日亜國公使其國書ヲ幕府ニ進呈シ鎖港ノ事
世界ノ例ヲ以テ推セハ必ス兵端ヲ開クベシト報告
ス此月五日大将軍再ヒ入朝ノ勅アリ因テ今般ハ
陸行ヲ止メ軍艦ニ乗リテ十二月廿七日江戸海ヲ出

帆シ海路ヲ経再ヒ上洛ス是而已ナラズ去年八月十
二日江城ニ有司ヲ集メ鎖港ノ應接ヲ為スベシト大
将軍親ラ命ヲ下セドモ其事行ハレズ同月十三日京
都ニ於テ大和行幸神武天皇ノ山陵ヲ拜シ給ヒ
春日山ニテ御親征ノ軍議アラセラルベキ旨勅
命アリシ以来搢紳幕府ニ右スル者ハ其項長州藩ノ
人望アルヲ嫉ミ朝廷ニ誣幕府ニ勧メ其間ヲ阻ム
是ニ於テ幕長ノ間彌割離隙テ志ヲ摸稜ニ持チ其間
ヲ窺フ者衝ク時ヲ得長藩ノ聲威アルハ自立ノ深謀
ニ出ツト浸潤ノ毀行ハルヽヨリ朝廷隱ニ毛利家

ヲ踈シ給フノ座ニ乗シ長藩攘夷親征ノ勅命ヲ請フテ天下ニ布リ是至尊ヲ挾ミ天下ニ號令セント欲スルノ私意アル旨ヲ屢受ニ愬フ朝廷忽ニ長藩ヲ疑ハセラレ八月十八日夜中川宮ヲ始搢紳及會津中将以下武臣相會シ遽ニ事ヲ圖リ三條家以下月卿雲客及ヒ長藩ヲ擯斥スルニ至リ諸藩脱走ノ徒諸所ニ嘯合シ或ハ大和ニ暴発シテ十津川ニ籠リ或ハ但馬ニ蜂起シ生野ノ縣令ヲ襲フト雖モ不日ニ征討アリテ一時鎮靜ス然レ𪜈自然人氣平穏ナラズ戰々兢々トシテ危殆ナラザルモノ無ク是天朝ニ於テハ外交拒絶

ノ宸慮甚厳ニテ太宰帥熾仁親王ニ攘夷鎖港ノ別勅使トシテ関東ニ発向ノ 勅命アリ後日此事ハ止ラレシカトモ是ヨリ浮浪人諸方ニ出没シテ攘夷ヲ唱ヘ或ハ士庶有名ノ者ヲ暴殺シ其首級ヲ梟首シ或ハ江戸ニ於テ外國品販賣ノ者数名ヲ斬リ尚其商賈ヲ止メザル者ハ天誅ヲ加ヘン或ハ何地ニ放火シ灰燼ト為スベシナド不可謂旨趣ヲ書記セシ張紙ヲ京阪及江戸府諸人群集ノ盛場ニ掲ケ看者ノ膽ヲ冷サシム此半處士桃井儀八推家ニ就キ浮浪千有余人上野ニ集リ横濱ヲ襲フノ謀議アリト自訴ス新田在

任ノ岩松満次郎モ此挙動ヲ傳ヘ聞鞍馬ニ鞭ヲ加ヘ馳来テ事ノ至急ヲ報告セシカバ又一層ノ動揺ヲ増シ俄ニ新令ヲ天下ニ布告シ五畿七道往還ノ士庶其管轄廳ノ簰験無キハ通行ヲ許サヾレバ今ニモ變アルカト疑ヒ巷説喋々自然(オツカラ)人心穏カナラズ内外ノ多難此時ニ湊合シ政府ノ恫疑大槩ナラ子バ穏便ヲ主トシ正(旧記日附脱ス)年隼人正竹本政明甲斐守竹本正雅横濱ニ出張シ猶ホートツンガ一件談判丁寧反覆ニ及ブトイヘドモ權之丞和一郎等ホートツンニハ罪無キ旨ヲ云ヘルヲ以テ既ニ彼ガ禁固ヲ解ケリ且彼ニ罪ナシ

トスル時ハ其冀望ニ随(マカセ)セ小笠原島ヘ歸住サセシムルトモ誰カ之ヲ不條理ト為シヤ且島民等ガホーツンニ罪アリトスルハ彼ヲ憎ミ在島ノ官吏ガ罪アリトテ囚虜ト為セシ驥尾ニ附島ヲ追退ケントノ私情ニ出レバ之ヲ以テ有罪トスルハ未ダ穿鑿ノ足ラザルニ似タリ固ヨリ彼ハ極老ノ單身死期テ托スルモノハ兼テ愛育スル所ノケレガ子ドモ而已也今矍鑠也ト雖モ年齢已ニ八十有余仮令小罪アリト云フトモ罪ヲ宥メテ旧ニ復スヲ是亦誰カ非ト云ハンヤ等(ナド)失當ノ應答熟談整フベキ注視無シ此儘互ニ言争ヒ

月日ヲ将ル間ニ極老且病體ノホーツン若異變アラバ又一難事ニテ重スベシ其他長藩ノ處置モ未ダ機會ニ至ラズ然ルヲ各國一同シテ之ヲ斯煩シキ中ニ鎖港ノ事アリ既ニ客歳九月亜蘭両公使ヲ軍艦所ニ迎ヘ三港拒絶ノ書翰ヲ繳納シ横濱一港ヲ鎖サン旨ヲ談ズレ共肯フ色ナシ鎖港談判馬関償金ノ両件ハ不容易大事件然ルヲ大事ヲ閣キ勝テ小利ノ小事ヲ争フハ良策ナラズ今ホーツンガ犯罪ヲ辨論ストモ一旦彼方ニテ無罪トセシヲ更ニ有罪ニ反サンハ最難シ彌無罪也トセバ何ヲ以テ帰島ヲ拒ン然レバ小事ハ彼ニ勝ヲ譲リ大事ノ談判ヲ纏シトノ遠謀ニヤ同

文久四年二月（旧記ニ日附ヲ脱ス）又外國奉行連署ニテ左ノ申稟テ閣老ニ進達シ其指令ヲ請フ

小笠原島ゟ連来候罪人之儀ニ付亜国ミニストルヘ引合筋之儀相伺候書付

外国奉行

去亥五月中小笠原島ゟ連来り同島ニ住之亜國人チヨーシホーツン罪犯之儀ニ付旧冬伺之上事情心得ゟ支配向并江川太郎左衛門并鉄砲方手附中浜万次郎并小人目付出役横浜表ヘ差遣亜国コンシユルヘ談判為致候処右者此向万次郎等之取計方并コン

シエルヨリ卿不分明唐等之義ヲ定早引合
ニモ不及詰リ此上ハ当方ヨリ前様方ヲミニストルヨリ断交ニ
可及旨コンシエル申張候ニ付此程中年人正
申談有横濱表ヘ出張ニ而前件之次第相及談
判候ヘ共對話書ヲ以テ申上候通リ彼是既繼断決ニ
相成兼ニ付此度私共之内ヘ罷越候可彦三郎旧冬
及引合候支配向并万次郎外小人目付並召連罷越
公使眼前ニ而コンシエルニ突合セ巨細談判為致候
様仕度将又ホーリッツ儀ハ右彼方ヘ引渡候御同
島居留之英民共ヲ差出候證書ヲ以テ右渡シ同船

ニ而連来リ候證人ヲ近日支配向之
者共等ヲ巨細申談候ヲ承リ當方郎ニ而右證
書等ヲ疑惑且ホーリッツニ不持等便之物品并子供等
此同島ヘ残シ置候趣申立種々苦情主張仕候ニ付
ヘ共前書実地ニ就キ取扱候者共ヘ今一應詰論
為致候ヲ以テ真ノ與證之次第モ彼方不服ニ儀ハ
相顕レ可申哉奉存候右係彼方談判之上其罪
ヲ差許ハ小笠原島ヘ再ヒ帰住為致候方猶申立
候上ハ一概差留候筋ニモ無之候ヘ共右理否ニ付猶
彼方存寄次第便船等ニ而可相送哉右奏聞此段相

之趣掛合候節も答之一端ニ而罷状分明之上ハ彼
方ニ於而仕掛有當之義ニ有之候得共ホーツン儀ハ格別
之老人ニ而も有之體裁等ニ而も實ニ憫然ニ而是
迄罷出居候之厚意を以テ船中旅費等之為メ洋
銀千ドルラル計贈差遣可申候得共關早ニ可然取計
可申旨公使コンシユル等ヘ申談取極メ候得共二方ニも可
有之哉ニ奉存候ホーツン儀八十有余之老年ニ而
殊ニ病氣之趣ニも申唱候儀ニ付而ハ若病死之程
も難計唯々互ひニ申争ひ而已候而時日を相移居候へ
者如何様ニ而も何等否出来可申哉も心配仕候得共前文
之趣可然ハ思召候ハヽ早々ニ御下知も有之様仕度候依之
此段奉伺候以上

子二月

竹本隼人正
竹本甲斐守
小笠原摂津守
田村肥後守

覚

書面伺之通可被取計候事

指令ノ月日回記ニ脱ス石ノ書面ヲ附シ進達ノ申禀ト倶ニ交還
アリシカバ奉行相議ルニ最前此事件ノ應接セシ所
以アレバトテ甲斐守竹本ニ委ヌ甲州擔當シ横濱ニ往
向ヒ公使岡士等ニ面晤談判數回ノ後事ノ是非ハ姑
ク閣キホーリツンガ宥免ニテ釋居且病體ヲ恤レミ一
身ノ眷養並護送ノ費用トシテ洋銀千弗ヲ支給スベ
キニ決シ公使快然承諾遂ニ整ヒ事件一切ヲ交受後
日ノ異論ナカラシムヘシト要言ス于此至リ全ク談
判注視ノ如ク整ヒ歸府シテ應接ノ顛末ヲ具状シ同
四月廿一件決、着謝辭ノ書翰案ヲ草シ尚同廿二日眷

養並護送入費トシテ賜金贈與ノ添翰ヲモ草シ倶ニ
同廿四日正名ニ進出同廿七日左ノ神奈川奉行ヘノ
達書案ヲ附シ交還ス

神奈川奉行ヘ達案

覚

亜国ミニストルヘ外国奉行ゟ別紙寫之通書簡
差遣候処得其意其地税銀之内を以亜国ミ
ニストルヘ可被相渡候事

右ノ如ク指令アリシカハ同廿九日閣老連署一通外
国奉行連署一通ヲ神奈川方ヘ交付三坂並轄文牧直

十二 公使ヘ逓達ス其書翰左ノ如シ

亜墨利加合衆国ミニストルレシデント
エキセルレンシー
ロヘルトエッチプラインへ

以書翰申入候小笠原島在民ホーレツン一条ニ付於彼
外国奉行竹本甲斐守より同人存意之程其許
迄申談及ひし処早速承諾せられ兼而被申立
候書簡廉紙を附わたされしホーレツン之事ニ付而ハ
我政府之関係無之ニ依定候而談判之顛末
委細兼知有之其許貴国懇親永続之真意を
表せられし事不堪感謝右申入度拝具謹言

元治元年子四月廿九日

板倉周防守 花押
井上河内守 花押
牧野周防守 花押

亜墨利加合衆国ミニストルレシデント
エキセルレンシー
ロヘルトエッチプラインへ

以書翰申入候貴国人ショーシホーレツン之儀ニ付此程甲
斐守より談判及ひし処右一事者其許被引受候然
處着ニ偏セし候厚意可謝ニ存候右ホーレツン

一身着養并渡送方等入費として可為之ニ付洋銀千
弗差送り度旨収手有之候右様致度存候此段申入候拝具

謹言

元治元年子四月廿九日

竹本隼人正

竹本甲斐守

小笠原摂津守

菊池伊豫守

柴田日向守

土屋豊前守

同五月四日神奈川方ヨリ左ノ書ヲ達シ来ル至テ此

交收異議ナリ済ミテ一件全結局ス

ジナンジホツトン人名のため江戸より送れる洋銀一

千枚の為と合衆国コンシユル、コロ子ル、シラルジ、ヱス、

フヰスセル氏子神奈川運上所長官拂ひ賜ふへし但

此書の下ニ記せる請取書を以元分為るへし

千八百六十四年第六月六日　神奈川

在日本合衆国ミニストルレシデント

ロヘルト、ヱツチ、フロイン識

在日本神奈川合衆国コンシユル所おゐて

千八百六十四年第六月六日今日上ニ載せる洋銀

一千枚を神奈川運上所にて落手セリ

合衆國コンシユル

ジヨルジ、アス、フヰスセル

岡士所印

圖書局文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan